

『竹取物語』における初期研究の見直し

弘前大学大学院 教育学研究科 教科教育専攻

国語教育専修 国文学分野

一三六二〇二 小西 周平

『竹取物語』における初期研究の見直し

弘前大学大学院 教育学研究科 教科教育専攻

国語教育専修

国文学分野

一三G P二〇二

小西 周平

《目次》

はじめに

第一章 『竹取物語』研究論史―五人の貴公子のモデル論を中心として―

第一節 『竹取物語』先行研究

第一項 研究萌芽時代の『竹取物語』研究

第二項 古典学時代(江戸期)の『竹取物語』研究

第三項 国文学時代(明治以降)の『竹取物語』研究

第四項 国文学時代(戦前)の『竹取物語』研究

第五項 国文学時代(戦後)の『竹取物語』研究

第二節 文学史研究の中における『竹取物語』

第三節 教科書・絵本研究における『竹取物語』

第四節 国学・新国学における『竹取物語』

第一項 国学と『竹取物語』

第二項 新国学と『竹取物語』

第二章 加納諸平『竹取物語考』論

第一節 加納諸平に関する先行研究

第一項 加納諸平概要

第二項 加納諸平に関する主な先行研究

第三項 『竹取物語考』について

第二節 近世から近代における国文学と古典

第一項 「和学」「古学」「歌学」「国学」の名称、範囲について

第二項 古典学時代(江戸期)の国学者

第三項 国文学時代(明治以降)の国学者

第三節 『竹取物語考』解釈の問題点

第一項 モデル論と出典論

第二項 奥津春雄による加納諸平『竹取物語考』観

第三章 研究の達成及び課題点

第一節 研究の達成

第二節 今後の課題点

おわりに

補足資料① 田中大秀『竹取翁物語解』五人の貴公子註釈関連

補足資料② 「竹取物語」主要研究論文リスト(平成十二年～平成二十三年)

はじめに

過去から現在に至る膨大な『竹取物語』研究の中でも、その嚆矢とされる近世国学による研究は近代から現在に至るまでの大きな研究の礎を築いたとされる。その中でも田中大秀（一七七七—一八四七）の『竹取翁物語解』、加納諸平（一八〇六—一八五七）の『竹取物語考』は諸研究者に影響を与え、受け入れられた時期の違いはあるものの、現在まで特に研究史を参照する際大きな意味合いを持っている。

本論における第一の目的は『竹取物語考』を中心に据えて前後の文学研究史を精査することである。

竹取研究の大きな転換点の一つは、大秀が著した『竹取翁物語解』の刊行から、明治二十年代に多くの注釈書が世に出た期間にある。その影響の大きさは、大秀による『竹取翁物語解』の本文が広く研究者の中で底本としての扱いを受けていたこともあると、先行する伝本研究が示していることから読み取れる。それほど浸透している大秀の一方、諸平の『竹取物語考』は大正十五年に没後七十年を記念しての刊行後、難題求婚譚の五人の貴公子の比定モデル論の提唱者としてよく知られているのが通説である。これは諸平の竹取研究の業績といつてよいだろう。このモデル論は『竹取物語の研究―達成と変容―』の中で奥津春雄³が現在の竹取研究内のモデル論の中心となつていると言及している。しかし、奥津自身も述べているように実際の諸平は、このモデル論を研究の副産物として扱っている。そのモデル論考察の目的は、『竹取物語』の製作年代の推察と、作者推定、そして作品内に朝廷内部への諷刺を込めたとする主張である。研究史概論⁴などでは「（諸平のモデル論が）大きな影響を与えた」とあるが、現在通用している全集⁵などでは、慎重な表現でモデル論の存在を述べているだけであり、モデル論が研究史において重要な位置づけで「継承」されているという印象はない。ここでは諸平のモデル論の主張を通じて貴公子のモデル論がそもそも成り立つかという議論のきっかけになったということであり、貴公子のモデル論が竹取の定説として受け入れられているということとはまったく違うレベルのことが書かれているだけである。

このように竹取研究の中において諸平の研究がモデル論だけ独り歩きしている理由、またそれが広く受け入れられているかのように奥津などが言及していた背景とはなにか。そこには、近世から現在における『竹取物語』研究史における位置づけとして、諸平の研究姿勢が近世の「国学」研究であるという意識が関係していたのではないかと考えられる。本論文では、諸平のモデル論を中心として『竹取物語』の近世国学研究が近代以降に及ぼした影響を論じた上で、文学研究史を精査して明らかにした近代国文学における古典文学研究の問題点について若干の考察を試みる。

本論文は三章構成である。第一章ではこれまでの『竹取物語』の先行研究論史と題し、主に諸平の論に関わる貴公子のモデル論を時代という縦の軸に据え、研究分野を横の軸として両面から『竹取物語』がどのように位置づけられているかについて調査、考察した。第二章では諸平の『竹取物語考』を取り上げ、主な趣旨を紹介し、近世国文学と近代国文学の接続を確認した後に、その流れをくむ現代の代表的研究者、奥津による『竹取物語考』に対する態度の問題について述べた。第三章では、達成

「中田剛直は「なお、今日では解本は大秀の異本数種を参照しての改竄本文として知られる。」（中田剛直『竹取物語の研究 校異篇解説篇』 塙書房 昭和四十年）と言及している。

³ 大正十三年生まれ、東京出身。昭和二十一年に早稲田大学文学部文学科国文学専攻卒業、高校教諭を経て昭和五十七年に徳島文理大学文学部教授に就任。「竹取物語の成立年代について」（『国文学研究』 昭和二十九年）を皮切りに約半世紀にわたって数々の竹取研究論文を著す。

⁴ 『日本古典文学研究史大事典』（西沢正史編 勉誠社 平成九年）他、『日本文学研究資料叢書 平安朝物語Ⅰ』（昭和五十年 有精堂出版）の「解説」では「研究史と展望」の項で「『竹取物語考』は」モデル問題を扱っている点で重要な課題を現代にまで投げかけている」と慎重な表現をとっている。

として二章を踏まえ、近世国学の影響を受けた新国学が、国文学研究史にもたらした影響を『竹取物語』を例として述べた。

第一章 『竹取物語』研究論史―五人の貴公子のモデル論を中心として―

第一節 『竹取物語』先行研究

『竹取物語』に関する先行研究は膨大であり、その全体像をとらえることが今日では困難である。そのため、個々の研究分野などに焦点を絞り、研究史を述べることが多々見られるが、本論では『日本古典文学研究史大事典』⁵および奥津の研究をもとに、二つの軸を用いる。一つは研究が本格的に為されている主に近世から現代にかけてまでの時代、時間軸。もう一つは文学史、神話などといった研究分野ごとの取り扱われ方の軸である。

一つ目の『竹取物語』の先行研究を時代区分ごとにまとめるにあたって、まずはどのように研究史を時代区分するかが問題となる。文学の研究史をどのように区分するかについては丸山茂の『国文学研究史』⁶に先行してまとめられている。

はやく、野村八良は「契沖以前・以後」で分け、久松潜一（以下久松と記述）は、『日本文学研究史』⁷の中で歌学時代、国学時代、国文学時代と分けていた⁸。

その後、藤田徳太郎の『日本文学研究史概説』ではおおまかに六期に分けられている。以下に記述すると、

第一期…古代より平安時代前期まで——自然発生的に研究の起こった時期
第二期…平安時代中期より吉野時代まで——研究方法が自覚的に発達した時期
第三期…室町時代より江戸時代初期まで——研究方法が固定し、かつ宗教的色彩を帯びてきた時期
第四期…元禄時代より明治時代初期まで——研究方法が学術的に発達し、種々の方面に非常な進歩を見た時期

第五期…明治大正時代——史的研究が発達し、研究上の整理が行われた時期
第六期…昭和時代——方法的な覚醒の促進せられた時期

となる。このように研究史区分だけでも諸説が唱えられているが、これらを踏まえて丸山は、以下の四つに区分している。

一、研究萌芽時代(奈良時代～平安時代)——研究が発生した時代で平安中期頃までの時期
二、作歌学時代(院政期～室町時代)——歌人により、作家を第一義として和歌・物語の研究が興隆した時期

三、古典学時代(江戸時代)——国学者・古典学者など専門学者により古典研究が進展した時期
四、国文学時代(明治以降)——近代国文学(日本文献学)が確立し、今日に至るまでの時期

本研究では、丸山のいう古典学時代、国文学時代の戦前期に焦点を当てる。『竹取物語』の本格的な初期研究を論じる契沖をはじめとした研究者による出典論が不可欠だからである。

『竹取物語』に限らず、古典作品の研究はその当時の研究分野の隆盛と時代の移行が同調するものである。よって記述が重なる点もあるが、あえて理解を深めるために重複しての記述も行い、『竹取物語』の研究史を概括して述べる。

⁴ 注3に同じ。

⁵ 『竹取物語の研究―達成と変容―』 翰林書房 平成十二年。

⁶ 文芸社 平成二十一年。

⁷ 山田書院 昭和三十二年。

⁸ 実際の章立てでは「古代文学時代」「中世歌学時代」「近世国文学時代」「近代国文学時代」となっている。

第一項 研究萌芽時代の『竹取物語』研究

近世以前における『竹取物語』に言及された文献を、いわゆる現代的な「文学研究」という形で捉えることは難しいと考えられる。しかし、『竹取物語』を言及する動きの中で『源氏物語』の「蓬生」^①「絵合」に見られる記述は特筆するべきと考える。

（蓬生）はかなき古歌、物語などやうのすきびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうのことにも心おそくものし給ふ。わざと好ましからねど、おのづから、また急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしなうちしてこそ、若き人は本草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかしづき給ひし御心おきてのままに、世の中をつつましきものに思ひて、まれにも言通ひ給ふべき御あたりをもさらに馴れ給はず、古りにたる御厨子あけて、

唐守、藐姑射^{はこや}の刀自、かぐや姫の物語の絵に描きたるをぞ、時々^{はこや}のまさぐりものにしたまふ。

（絵合）まづ、物語の出で来はじめの親なる竹取の翁にうつほの俊蔭を合はせて争ふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなけれど、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬあらむかし」と言ふ。右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけるもいとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるをあやまちとなす。絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひなり。

そして「手習」の巻では『竹取物語』冒頭を踏まえての描写が見られる。

夢のやうなる人を見奉るかなと尼君はよろこびて、せめて起こし据ゑつつ、御髪手づから梳り給ふ。（中略）目もあやに、いみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも、あやふき心地すれど、「などうか、いと心憂く、かばかりいみじく思ひ聞こゆるに、御心を立てては見え給ふ。いづくに誰と聞こえし人の、猿所にはいかでおはせしぞ」と、せめて問ふをいと恥づかしと思ひて、「あやしかりしほどにみな忘れたるにやあらむ、ありけむさまなどもさらにおぼえ侍らず。ただ、ほのかに思ひ出づることとは、ただ、いかでこの世にあらじと思ひつつ、夕暮ごとに端近くてながめしほどに、前近く大きな木のありし下より人の出で来て、率て行く心地なむせし。それより他のことは、我ながら、誰ともえ思ひ出でられ侍らず」といとうたげに言ひなして（中略）かぐや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりもめづらしき心地するに、いかなるもののひまに消え失せむとすらむと、静心なくぞ思しける。

『日本古典文学全集』の注釈を参照すると「いみじき天人の天降れる」話は数多くあるが、ここでは後の「危き心地」が浮舟の正体を知ったがためにいなくなってしまうのではないかと危惧することが、かぐや姫が正体がわかった後に天に帰ってしまうことに重ねているという展開などから『竹取物

① 引用は「日本古典文学全集」（小学館 昭和四十五年）より。以下、『源氏』本文はすべて同書より引用。

語』を踏まえたものであると考えられる。ここでは男たちの求愛に苦しみ傷ついた浮舟が同じく多くの男から求婚されたかぐや姫像と重ねられており、その孤独な浮舟を温かく迎える僧都と妹尼には翁姫の面影を見て取れる⁵⁰。「蓬生」は当時の『竹取物語』の享受の仕方として、「絵合」は『竹取物語』の文学的価値について、そして「手習」では『竹取物語』の後の成立という自意識をともなった文学作品としてそれぞれ『竹取物語』の重要性を示唆している。これらを「研究」と呼ぶには近世以降の角度とはあまりに違う。しかし、『竹取物語』の「物語文学」全体における位置付けに自覚的であったこと、また自らも『竹取物語』の後に位置する文学という自覚が多分にあったことは、「研究」という自覚に達しないしろ、貴重な視座であったといえる。

第二項 古典学時代(江戸期)の『竹取物語』研究

現代まで多くの研究が進められている『竹取物語』であるが、その本格的な研究の起源は江戸期にまで遡ると考えられる。江戸期の研究では契沖著の『河社』⁵¹（元禄八年（一六九五）頃）が先駆けとなる。『源氏物語』に「物語の出で来はじめの親」と記述があることや、「竹取翁」「かぐや姫」の人物の名前の出典、漢籍などに見える共通するあらすじの言及、そして五人の貴公子のうち、大伴大納言御行の名前が文武天皇の代の大臣であることも取り上げている。大秀の出典論や諸平などのモデル論に先駆けて五人の貴公子が実在の人物の名称を利用していると考えており、貴公子は『紀』、五つの宝物も漢籍などからの引用がなされているということは江戸期の研究によって定められた方向性といえる。契沖の『河社』が『竹取物語』についてほぼ初期の研究書であることは論を待たないが、その後の江戸期の中心の研究は訓詁註釈であり、小山儀『竹取物語抄』（天明四年（一七八四））が嚆矢となって粕毛呂成の『竹取物語伊佐々米言』（寛政五年（一七九三））田中躬之の『竹取物語抄補注』（天保十一年（一八四〇））などが刊行された。その後大秀の『竹取翁物語解』（天保二年（一八三一））が、師の本居宣長の『源氏物語』論にならって『竹取物語』が「物のあはれを知らしめるもの」と説きつつ諸本を参照・校訂して従来の諸説を集成し、後世に大きな影響を与えたといえる。また諸平の『竹取物語考』が、大秀の時点では比定が三人のみであった五人の貴公子全員のモデル論を展開しているが、刊行そのものは諸平の没後七十年を記念しての大正十五年である。

第三項 国文学時代(明治以降)の『竹取物語』研究

近代に入り、古典文学に関する研究も近代化を迫られる中で試行錯誤を繰り返す。著名なところでは明治十五年に東京大学文学部付属として新設された古典講習科があげられる。

この古典講習科は修業年限四年、小中村清矩・飯田武郷・久米幹文・佐佐木弘綱・物集高見等を教官とし、歴史政治文学を併せて講究するものであった。この古典講習科は数少ない人材の中から池辺義象・萩野由之・佐佐木信綱等の人材を出したが、それも十九年及び二十一年に各々一回、合わせてわずか二回の卒業生を送っただけで廃止となった。⁵²

また、高木市之助も『国文学五十年』の中で古典講習科について振り返っている。

⁵⁰ 大井田晴彦『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院 平成二十四年。
⁵¹ 『契沖全集』（久松潜一監修 岩波書店 昭和四十九年）の凡例より引用すると、「河社」一卷は古今の歴史、有識故実、言語、詩歌、物語、歌集等、極めて広汎なる範圍に亘って研究考証せる隨筆」とある。
⁵² 大久保正「文献学の成立」『国語と国文学』 四十二巻十号 昭和四十年。

ちょうどその頃（引用者注：明治十二年）東京大学に古典講習科という、後の選科にちよつと似たものが附設された。御承知のように東京大学は明治十年四月に法文理医の四学部を以て開設され、その文学部には史学哲学科、政治学科と和漢文学科があったんです。（中略）それは明治十五年と十七年の二回募集しただけで、修業年限は四年、明治二十一年にはもう廃止になっています。¹³

国文学時代、即ち近代における『竹取物語』の研究は他の古典作品研究史と同じく、注釈書が多く刊行され始める明治二十年代以降となる。平山城児によれば、「明治二十年代初期までは、いわゆる「古典」に接しようとしても、それらの古典は写本か版本の形で、ごく特種な研究者の書庫に秘蔵されていて、一般人が手軽に読みうる状態にはなかったという事情」¹⁴があった。そういった後の世代の研究者たちが「古典」のテキストに接することができるようになったのは「二十五年三月にかけて出版された、博文館の『日本文学全書』¹⁵二十四冊によるものである」という。『日本文学全書』は落合直文、池辺義象、萩野由之らによって刊行されたもので、広汎に流布した理由は比較的廉価である事、取扱いや携帯に便利である事、読みにくさがない事などから普及した¹⁶。鈴木弘恭の『標註竹取物語』（明治二十一年（一八八八））、鳥居枕の『竹取物語析義』（明治二十五年（一八九二））、星野忠直の『校註絵入竹取物語』（同）五十嵐政雄の『竹取物語裏解』（同）、今泉定介の『竹取物語講義』（明治二十六年（一八九三））、春山頼母・井上頼文の『竹取物語新釈』（同）、井上頼文の『竹取物語講義』（明治二十九年（一八九六））、落合直文の『竹取物語読本』（同）など、明治二十年代には多くの注釈本が刊行されている。大正期以降も藤井乙男・原田恭助『註解新釈竹取物語』（大正十年（一九二一））、池辺義象『新註対訳竹取物語』（大正十二年（一九二三））などが刊行された。

研究書としては、藤岡作太郎が『国文学全史・平安朝篇』（明治三十八年（一九〇五））において、『竹取物語』を「伝奇体（ロマンティック）小説」とよんで、「作者の想像に出でたる小説は、実に竹取を以てはじめとすべし」としている。このころ幸田露伴は『日本の古き物語の一に就きて』（明治四十四年）でそれまで『竹取物語』の原型とされていた「宝楼閣経」にかわり「仏説月上女経」を紹介してその類似点を挙げたが、近年まで参照されることは少なかった。また、この頃から『竹取物語』の主題論や方法論に言及されており、津田左右吉は『文学に現はれたる（我が）国民思想の研究』（大正五年（一九一六））で、『竹取物語』の主題を「王朝世態小説」と解釈して、「この物語の中心觀念が、恋にうき身をやつす當時の大宮人を描くところにある、その意味で写実小説であることは、一読して直に感じ得られるところである」と述べている。これに対して和辻哲郎は『日本精神史研究』（大正十五年（一九二六））の中で、津田の「写実小説」論を批判する「お伽噺としての竹取物語」を収めて「竹取物語は、「写實的」ということを特長とする世態小説ではない（中略）それはただお伽噺としてのみ正当に評価される」としている。ここで和辻がいう「お伽噺」は「現世のかなたの「永遠の美」をもとめて空想の世界を描いたフィクション」¹⁷である。大井田晴彦はこの見解の相違について「いわゆる白鳥処女説話と求婚譚のどちらをより重視するか、という価値観」¹⁸にもとづいていると述べている。

¹³ 『国文学五十年』岩波新書 岩波書店 昭和四十二年。

¹⁴ 『現代文学における古典の受容』有精堂 平成四年。

¹⁵ 『竹取物語』は明治二十三年五月に刊行された『日本文学全書』第一編に「伊勢物語」・「紫式部日記」・「住吉物語」・「徒然草」などとともに収録されている。

¹⁶ 塩田良平「古典と明治以後の文学」『岩波講座日本文学史 第十四巻』岩波書店 昭和三十四年。

¹⁷ 「和辻哲郎 精神史と古典文学」小峯和明『国文学 解釈と鑑賞』五十七巻 平成四年。

¹⁸ 『竹取物語 現代語訳対照・索引付』笠間書院 平成二十四年。

第四項 国文学時代(戦前)の『竹取物語』研究

国文学時代のうち、昭和二十年の大戦終了までを昭和期前半、戦前期と区切り、動向を述べる。島津久基の『竹取物語』が岩波文庫に収められたのは、昭和二年のことであり、啓蒙・普及の役割を果たしたとされる。他にも橘純一『竹取翁物語附註』(昭和五年(一九三〇))、高崎正秀『竹取物語新釈』(昭和六年(一九三一))、三谷栄一『竹取物語の鑑賞』(昭和十四年(一九三九))なども刊行された。研究書では、柳田国男の『昔話と文学』(創元社 昭和十三年(一九三八))が、民俗学の立場から論じた「竹取翁」「竹伐爺(たけきりじい)」を収め、広く各地に伝わる竹取説話への注目を促している。近藤忠義の『日本文学原論』¹⁶⁾(同文書院 昭和十二年(一九三七))は、藤岡作太郎・津田左右吉の両説を止揚しようとして、「伝奇的素材の知的な取り扱ひ」と「現実的素材の写實的な取り扱ひ」に注目し、「伝説的世界と日常生活との統一を、リアリスティックな視角に於て試みようとするものが『竹取物語』全篇の根本的態度である」と説いている。五十嵐力の『平安朝文学史(上)』(東京堂出版 昭和十二年―昭和十四年(一九三七―一九三九))は、文学史の視点から最初の小説として成立した『竹取物語』の意義を追求し、高崎正秀による『物語文学序説』(青磁社 昭和十七年(一九四二))は、柳田民俗学を踏まえて、竹取翁の伝承に独自の見解(「炭焼長者譚の分類として解釈」)を示し、岡一男の『古典と作家』(文林堂双魚房 昭和十八年(一九四三))には、作者の遍照説を提起した「竹取物語私攷」を収めている。

第五項 国文学時代(戦後)の『竹取物語』研究

奥津は戦後からの研究史を大まかに二つに区分している。一つは風巻景次郎にはじまる歴史社会学派の潮流が残る戦後から一九六十年代にかけて。もう一つは一九七十年代以降の記号論的構造分析である。風巻の主張は中国の志怪小説の成立史と対比して、物語文学の成立に「崩壊した氏族伝承」が関わっているというものである。この歴史社会学派の視点からは西郷信綱や南波浩により、物語の成立基盤、文学伝承基盤が論じられるようになった。また物語史の視点からは、三谷栄一によって物語史の中に『竹取物語』と「竹取説話」を位置づけるべく論じられていった。その後は上坂信男や野口元大により『うつほ物語』への展開を重視されるなどの流れが存在している。国語学からも築島裕や阪倉篤義が論文の中で『竹取物語』に言及するなど、幅広い視点からの考察もされるようになった。昭和四十五年に刊行された日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅰ』にはそれまでの主要な既発表論文を十三編収録して、戦前戦後の主要研究論文を網羅することができる。その後も、室伏信助、小嶋菜温子、曽根誠一といった多くの研究者によって構造論や、解釈論、神話伝説、絵本、絵巻などの文脈で捉えられるなど様々な細部を検証される媒体として取り扱われていく。三谷邦明は以下の七つに竹取研究の論点が置かれていると言及²⁰⁾している。

- ① 翁の問題から竹取翁(万葉集)の解釈
- ② 全知的視点(竹取)から多視点的な視点(源氏)の遠近法へ
- ③ 「話素」と「描写」の分析により「書かれた本文」の特性の指摘
- ④ 「描写」の付加による「作者」という神話の破壊
- ⑤ 語源的説明が神話的世界との決別によって成立したこと
- ⑥ 「竹取物語」の位相は本文表現そのものであって、話型やモチーフ等にあるわけではないこと
- ⑦ 律令的官人意識の挫折の中から戯作的色調を帯びながら誕生したこと

¹⁶⁾ 著者名義は藤村作。

²⁰⁾ 三谷邦明「竹取物語」『体系 物語文学史 第三巻』 有精堂出版 昭和五十八年。

なお、昭和五十九年までの主要文献については雨海博洋『現代語訳対照 竹取物語』（旺文社文庫 昭和六十年）、室伏信助『全対訳日本古典新書 竹取物語』（創英社 昭和五十九年）の各「文献目録」で、昭和六十年より平成十四年までの研究文献目録は関根賢司 高橋享編『新編竹取物語』（おうふう 平成十五年）に収められている。平成十二年より平成二十二年の十年間は筆者が巻末に作成したものを添付した。

第二節 文学史研究における『竹取物語』

『竹取物語』が多くの物語文学に影響を与えたという言説は広く流布しているように思われるが、その検証には文学史研究の側面からどのように『竹取物語』が位置づけられているかを見直さなければならぬ。

上坂信男は「物語の出で来はじめの祖―竹取物語の文学史的意義―」の中で岡一男や益田勝実の言及を引用しつつ、

白鳥処女説話や貴子化生説話など素材となった説話・民譚が存在したことも否むことのできない事実であるうから、結局、『竹取物語』は一回的に成立したものであり、作者の眼前に存在する素材群を自家薬籠の中に収めて、一篇の作品を創成した（中略）成功こそ「物語の出で来はじめの祖」と称されるに値することなのであった²¹

と、述べている。物語文学の「祖」と判断するには『竹取物語』がはたして後世の「物語」と同等にみなしてよいかが一つの焦点となるため、その成立過程は重要視される。

物語文学の成立については藤井貞和が『物語文学成立史』²²の中で、上代文献にみられる「フルコト」と「カタリ」の二語を取り上げて丁寧に検証している。この中で、物語文学の成立について以下の七つの項目に整理している。

- ① 古伝承の分厚い伝流があったこと。
- ② モノガタリの中では昔話的伝承が行われていたこと。
- ③ 和歌をめぐる説話が行われていたこと。
- ④ 作り話が大に行われていたこと。
- ⑤ 漢文の叙事文学の存在が知られ、本邦でも漢文小説類が作られたこと。
- ⑥ 仮名文字との出会いによって、書き物の中に昔話的伝承の世界、語りの場所を仮構し得るようになったこと。
- ⑦ 文人や僧侶、知識人などに物語文学を産む精神のようなものが熟成してきたこと。

奥津は、藤井の研究が「物語文学を、口頭伝承の発展・展開の先にあるもの」と理解し、「物語文学成立以前」の整理として評価しながらも風巻景次郎以来の物語成立説の深化の一つであることを⑦の言及を根拠に指摘している。奥津は藤井の言及を踏まえつつ、さらに物語文学の発生に必要な要素を物語の創作動機に求めている。伝承の当然の帰結として物語文学が生まれるということではないとい

²¹ 『国文学 解釈と教材の研究』十二巻 昭和四十二年。

²² 東京大学出版会 昭和六十二年。

うのである。

問題はそういう創作をしようとする動機、すなわち創作動機である。(中略) 物語文学の場合は、詠嘆を伴うにしても、何らかの知的主題、特に『竹取物語』以下の物語文学においては、人生・社会に対する批判的主題が創作を促したと思われる。その批判精神は、先進文化としての漢文学の影響と、古代貴族社会の成熟によって生まれたと考えられるのであって、こうした飛躍的な変質なしには、物語という仮名散文の叙事文学は生まれなかったと考えられる。⁸⁵

つまり、それまでの「口承」と「物語」を分かつものとして、藤井があくまで「物語文学」に対しての外的要因を求めたのに対し、奥津はこの見解を前提として、さらに⑦に関わって「創作動機」の差異を挙げているのである。そして、散佚物語を除けば『竹取物語』がその「出で来はじめの祖」となったのはこの作品の持つ「批判的主題」、五人の貴公子たちの失敗談をもつ構成だという。

もちろん藤井がいうように、これがただちに『源氏物語』が文学史という視点から『竹取物語』を重要視したことはない。『竹取物語』が口承を素材という形で向き合い接続したことこそが、文学史研究の中で大きな意義を持ったのである。漢文竹取先行説や「原竹取」説のように『竹取物語』が一回的に成立したのではないといった研究も過去には散見されるが、本論ではあくまで『竹取物語』の一回的成立を支持したい。

第三節 教科書・絵本研究における『竹取物語』

いわゆる定番教材として『竹取物語』は戦後多くの教科書に取り上げられている⁸⁶にも関わらず、国語科等教材あるいは絵本などに収録される『竹取物語』についてはその指導方法についての諸論文は見受けられるものの、どのように採録が行われてきたのかという点については、さほど言及されていない。福田孝氏⁸⁷は全国大学国語教育学会の口頭発表で『竹取物語』の教材の系譜を追っているが、それによると巖谷小波の『小波お伽全集』(昭和三年～五年)の第十一巻伝説篇に所収される「かぐや姫」が「五人の求婚者」があげられており、『竹取物語』の翻案とされる。

その小波が監修したと記されている小野美智子訳の『少女小説 かぐや姫の物語』は、明治四十四年に朝日新聞広告が確認できるため、『竹取物語』の翻案に「かぐや姫」という名称がつかわれているのは、近代ではこれが初と考えられる。

福田氏はまた、第一期国定教科書から第三期国定教科書では取り扱われておらず、『尋常小学読本』第二期修正―黒表紙本(大正十八年)が取扱いの初出だとしている。中嶋真弓⁸⁸が論文の中で対象とした教科書乃至絵本は、教科書は昭和八年から昭和二十八年、絵本は昭和二年から昭和二十八年の幅となっている。このように近代における『竹取物語』の研究史以外における表出をたどるのは難しいが、海外向け「ちりめん本」などでは「Japanese Fairy Tale “Princess Splendor”」として明治二十

⁸⁵ 『竹取物語の研究―達成と変容―』 翰林書房 平成十二年。

⁸⁶ 藤井は「物語の出で来はじめの親」(『別冊国文学』3号 竹取物語伊勢物語必携) 鈴木日出男編 昭和六十三年)の中で「その「物語の始祖」の意味は一種の神話起源論としてそうだとしたことであって、『源氏物語』の書き手がある種の物語文学史として十世紀の初頭にこの『竹取物語』が書かれたと認識していたということではけっしてない」と言及している。

⁸⁷ 阿武泉著『教科書掲載作品 13000』(日外アソシエーツ 平成二十年)によれば、平成二十年現在『竹取物語』を新制高等学校教科書に採用しているのは昭和二十八年から平成十二年までで三十七社にも及ぶ。

⁸⁸ 「古典教材としての『竹取物語』」全国大学国語教育学会発表要旨集 平成二十五年。

⁸⁷ 「小学校国語教科書教材「かぐやひめ」採録の変遷」『学び舎…教職課程研究』平成二十二年。

二年に単発挿絵本が作られている⁸²ことが確認される。このように絵本は広汎な視点から検証しなければならぬため、今後全国の図書館等の蔵書としてある戦前から戦後黎明期にかけて、出版社ごとの特色をとらえつつ検証することが求められている。教科書についても同様に、「教科書」の定義と書籍の範囲を確定させつつ、各出版社、近代の時代⁸³ことや学年など多角的な視点に基づいて『竹取物語』の取り上げ方の特色を調査していきたいと考えるが、その作業の膨大なことから今後の課題としたい。

第四節 国学・新国学における『竹取物語』

第一項 国学と『竹取物語』

久松潜一の『日本文学研究史』によれば、近世国学で重要視されたのは加茂真淵の「ますらをぶり」を体現したとされる『万葉集』であり、本居宣長が「もののあはれ」を見出した『源氏物語』であった。『万葉集』から『源氏物語』にかけての作品を久松は「古代文学」と称し、こうした「古代文学」を焦点として近世国学が「文学的古典による古代言語の開明」や「文学による美や人間の把握」に努めたと述べている。近世国学は中世において隆盛した古今伝授を否定することから始まり、さらに当時の儒学や漢学といった「官学」と対となる「民間」の学問として自身の性格を位置づけたことにより、近世末の幕府の衰退に伴って勢力をまし、平田篤胤の頃に実践的性格を強めた。

こうした中で『竹取物語』を久松のいう「古代文学」として捉えたのは大秀であった。宣長の『源氏物語玉の小櫛』の「もののあはれ」を理とする物語観を重んじた大秀は首巻である「物語ぶみを読む意ばへ」で『竹取物語』もまた「もののあはれ」を説いていることに言及している。

（源氏物語の）殊に、あはれふかき筋を論ひて、凡物語は、物の哀知べき便なるよしを喻されたるを思へし。（中略）されば、此物語も、物の哀知べきくさはひなれば、其意もて讀味べき書になむ有ける。

『竹取翁物語解』がこのように説いたものの、その後の国学における全体の潮流の中で『竹取物語』が「もののあはれ」を理とする作品だと捉えられることは少なく、多くの国学者に参照されることはなかったと思われる。諸平以外に『竹取物語』のみを本格的に論じる研究がないことから、そのように考えられるが、その理由の一つは『竹取翁物語解』の研究精度の高さがある。当時の研究として最高峰に位置してしまったため、後続に至らなかつたということがあるのではないか。同様に『古事記』は宣長によって論じられた後、近代まで追隨する文献は現れなかつた。『竹取物語』も同様の現象と考えられる。こうした先入観から、諸平の『竹取物語考』はある種意図的に刊行が遅れたと考えることも出来るが、この点については当時の出版事情も含め、今後より詳細に研究を深めたい。

第二項 新国学と『竹取物語』

奥津が言及するところによると「柳田国男にはじまる民俗学的研究が盛行した時期」⁸⁴に著された「竹取翁考」においての、「現存『竹取物語』は、それ以前に存在した竹取説話、または羽衣説話」⁸⁵を継承しつつ文章化したものであるという説が現在の竹取研究の基盤になっている。それはすなわち、民俗学研究の方法論が、現在の竹取研究の成立論や構造論において有効だと判断され、承認を受けて

⁸² 石澤小枝子『ちりめん本のすべて』三弥井書店 平成十六年。

⁸³ 注 5 に同じ。

⁸⁴ 注 5 に同じ。

いるように思われる。奥津はこれらを「柳田説の掌の上にある」と表現しているのではないか。しかし、これは奥津の捉え方と違い、民俗学的成立論における文言の含意の広さと取ることも出来る。たとえば、「竹取翁考」の成立に関しての一節で、

竹取物語が純然たる一個の創作で無く、世にある説話を採つて潤色したものだといふことは、もう何人かの註釈家の言に由つて、是を否み得る人は無くなつて居ることゝ思ふ。

とあるが、この「潤色」という範囲は『竹取物語』を説話文学と物語文学の両方に触れる可能性を窺わせる。説話の換骨奪胎、口承文芸の形象という形でとれば物語文学の始祖となり、説話の焼き直しに過ぎないと解釈すれば説話文学となる。柳田はそれまでの潮流を総括して、『竹取物語』の成立論を述べているのだが、柳田が成立論を表明するに至った経緯を明らかにしつつ、その妥当性について検討していかなければ際限なく引用される中で原義を見据えない批判に晒される可能性もある。また、柳田が「説話の自由区域」と表現した求婚譚にしても、民俗学における説話類型に当てはまらないという点で述べたに過ぎず、「類型」と「創作」の境界が非常に不鮮明であることに留意しておく必要がある。つまり、「説話」との異同Ⅱ「創作」のような単純な等式をつくるのではなく、本文の表現へ丁寧な検討を加えていくことで、既存の民俗学的手法に端を発する『竹取物語』成立論に疑義を唱えることが出来るのではないかと考えられる。

第二章 加納諸平『竹取物語考』論

ここでは諸平とその著書『竹取物語考』についての概要とその周辺事情を述べたあと、これらの論の継承性の問題点を考察する。なお、諸平の『考』の論の中でも主として引用される五人の貴公子のモデル論を中心とする。

第一節 加納諸平に関する先行研究

第一項 加納諸平概要

加納諸平は江戸後期の歌人、国学者である。号は柿園。別名、兄瓶。遠州の国学者夏目甕磨の長子である。父甕磨が本居大平に代講者として和歌山に招かれたが病臥したため、十六歳の諸平がよばれて看護したのが師となる本居大平との縁の始まりとなる。翌文政五年（一八二二）甕磨は摂津昆陽寺で急逝し、十八歳で紀州和歌山の加納家の養子となる。本居大平に国学を学び、文政十一年（一八二八）、二十三歳の時に『類題和歌鮭玉集』第一編を刊行、この書の編集の目的は父甕磨の歌を世に伝えたいのが主で、第一編には一八〇首余を入れた。その後第七編まで刊行され、文政期の当代歌人に絞って撰録したこの書は、地方歌人の育成や地方歌壇の振興に貢献した。さらに和歌山藩の藩命を受けて『紀伊続風土記』『紀伊国名所図会』の編集にあたるも、弘化四年（一八四七）藩政の紛糾分裂から、伊達千広邸で長沢伴雄に毒をもらえ、以後数年、失心風を病み、嘉永二年（一八四九）には反対派の策謀から投獄されるに至った。体調の回復したのは同五年であった。後に紀州藩国学所総裁となる。歌論の考究にも努め、晩年は「万葉英風の道」を目指して安政三年（一八五七）六月卒中で倒れて亡くなる。

その後多くの草稿の散逸を恐れた佐々木春夫が「枕草紙註釈」「栄花物語校本」「古今集真名序解」「万葉名所集」「竹取物語考」「柿園雑考」「柿園拾葉」「安米都知」「困基濫腸考」などをはじめとして保管していた。しかし、戦火によって多くが失われている³³⁾。

第二項 加納諸平に関する主な先行研究

黒岩一郎³⁴⁾によれば、諸平はながらく「不遇の歌人」であったという。佐佐木信綱の『日本歌学史』や『近世和歌史』や『和歌入門』に取り上げられつつ、また福井久蔵の同種の著書に取り上げられるものの、それらの業績がかえって仇となり後の研究が遅々として進まなかったと述べている。森敬三も没後七十年の大正十五年に「加納諸平に就いて」³⁵⁾で諸平の生涯を年表にまとめているが、やはりその資料の少なさによる研究の遅れを指摘している。

現在では包括的に戦後山本嘉将がまとめた二冊が大きく寄与する。『近世和歌史論』の中では諸平の伝記をまとめて、著書を取り上げており、『加納諸平の研究』はそれに加えてこれまで散発していた諸平の評伝をまとめて精査し、かつその和歌と著作を網羅した意味で画期的な書であるといえる。もちろんそれ以前にも平石基次著『国學者夏目甕磨と歌人加納諸平』（昭和四十五年）、近年の論文では安原清輔、川田順などがそれぞれ加納諸平論を展開している。近年では須山高明の論文³⁶⁾など、和歌の

³³⁾ 『近世和歌史論』のなかで山本はこの「兵火佚亡説」に疑問を呈している。

³⁴⁾ 書評（山本嘉将著「加納諸平の研究」） 黒岩一郎 『国語と国文学』 昭和三十七年三月号。

³⁵⁾ 『国語と国文学』 大正十五年。

³⁶⁾ 『加納諸平之善水宛書簡』を巡る二、三の問題―『類題鮭玉集』編集の話題を中心として― 和歌山県立文書館紀要 平成十四年。

研究に傾きがちだった諸平の書簡に関する研究も行われている。

第三項 『竹取物語考』について

『竹取物語考』は、加納諸平によって近世末に著された書ではあるが、翻刻、刊行されたことで研究史上に乗るのは大正末である。大正十五年、諸平没後七十年祭執行に際して、諸平門下の一人である室谷賀親の子供、鉄腸が、佐々木春夫の孫計次郎と協力して、記念事業として遺稿の中から他に「条里図帳考」、「枕詞考の二つとともに刊行された。鉄腸はこの著について「いまだ例のない良著」と評価している。また、井上豊太郎⁸³は「諸平の国文学者としての地位を明かにするばかりでなく、我国国文学者解釈史上を飾る一大論文」たると絶賛している。

本編は、総論と考証からなっている。総論では、『竹取物語』の成立論、さらに難題求婚譚に登場する五人の貴公子のモデル論とその「色好み」への諷刺を指摘している。その五人の伝について詳細に論じたのち、さらに「御室戸」「なよ竹」「かぐや姫」「鍛冶司」「もとの上」「楫取の御神」「大炊寮」「八島の鼎」「内侍」「少将」「五衛のつかさ」「つきのいはかさ」等の事項について考証、総論での推論を裏付けようと試みている。特に『竹取物語』に「浦嶋子伝」のごとき原形があったとする漢文竹取先行説の考えを述べており、これは後の竹取研究にも大きな影響を与えた。折口信夫⁸⁴は「彼の研究法には、近代的な科学質も、彼らしい直観性も現れて、比類渺い立派なものである」と評価している。

第二節 近世から近代における国学と古典

本節では『竹取物語考』を執筆した諸平を規定する「国学者」という前提を考察したのち、国文学における「古典」と国学の影響関係について、主として国学からの方法論の視点を述べる。

第一項 「和学」「古学」「歌学」「国学」の名称、範囲について

本節で国学者を取り扱うにあたり、最初に「国学」という概念について意味するところを考察する。「国学」という語の初出は『日本国語大辞典 第二版』によれば、七十八年成立の「令義解（りようのぎげ）」（学・釈奠（てん）条）にある「凡大学⁸⁵国学。毎年春秋二仲之月上丁。釈奠於先聖孔宣父」であるが、これは山田孝雄によれば「京都に設けられた大学に対して」⁸⁶地方に設けられた官立学校のことである。学問としての「国学」は同辞典の中では宣長の「うひ山ふみ」（二七九九）で言及されている「物学（ものまなび）」とは、皇朝の学問をいふ、そもそもむかしより、ただ学問とのみいへば、漢学のことなる故に、その学と分むために、皇国の事の学をば、和学或は国学などいふならひなれども、そはいたくわるきいひざま也」⁸⁷や、谷川士清「和訓栞」（一七七七一—一八八七）内の「国学は倭学也。神学あり、歌学あり、虎關の国学者芸術也といへるは有識者流を指ていへるにや。道德に關らぬ如くおもへるはいぶかし。」などがある。山田は、学問としての「国学」が具体的に興った時期については明言を避けている。『国学の本義』の中では虎關師鍊の「元亨釈書」内における「増命の賛のうちにいふ所」を引用しているが、これも「国学」に内包する「芸術」という形で言葉を結びつけつつ、それらの語義の違いに触れながら現在の「国学」と本意は違うと述べている。このように「最古」の

⁸³ 「加納諸平の研究」 井上豊太郎 起雲閣。

⁸⁴ 「近代短歌」『日本文学大系』 河出書房 昭和十五年。

⁸⁵ 『国学の本義』 畝傍書房 昭和十七年。

⁸⁶ 同辞典補注を参照すると「本居宣長は（中略）「うひ山ふみ」のなかで、学問の名称としての「国学」を退け、自身では「古学」とよんでいる」とある。

「国学」をめぐるのは現在では困難である。

以上は語としての「国学」の起源を探っていたのであるが、視点を変え、語としてではなく、意識としての学問「国学」を考えてみる。その基礎を固めたのは荷田春満であると山田は述べており、春満の「創学校啓」（一七二八）を引いて彼の述べる「国学の真髄」について言及している。

その主張する所の学は「国家之学」であり「皇国之学」であつて「国学」といふのはそれらを約めて云つたものであらう。

春満のいうところの「国学」とは「国家（皇国）の学問」であり、すなわち「からごころ」に染まらない純粹な思想を求めるものであったという。

芳賀矢一もまた「國學とは何ぞや」⁸⁸の中で具体的文献には触れてはいないものの、山田と同様の見解を示している。芳賀がドイツの文献学を国学に比して科学あるいは学問として成り立つかどうかを主張した「國學とは何ぞや」内では、春満の国学創設者としての妥当性を以下のように述べている。

学問に正伝がなくて、秘事秘伝を尊ぶ世の中から引き続いて、どれがよいかわるいかわからない、間違つた学問の仕方になつて居つた所を、すべて昔の世に戻してやらうといふのが契沖、長流、茂睡などの主義で、とにかく鎌倉時代の僻説を交ぜてはいかぬ、平安朝、もつと前の奈良朝以前に遡つて日本国の根本から研究して来いといふのでありましたが、（中略）さういふ中で春満は更に一步を進めて、基礎を国語国文の上に置き、それを以て純然たる日本人の道とするところを明らかにしようとしたのです。

この「道」という概念は重要であり、芳賀と同様山田も西洋の文献学との類似性を認めつつ「国学」がもつ明確な違いに「道」を探求することを挙げている。

先づ文献学といふ名目を考へてみると、これは何を目的としてゐるのであるかは名目だけでは分らぬ。古語を研究の基礎として、古い文献を研究するといふことが最終の目的であるならば、わが国学と全然同一であるとはいはれない。国学は古語古代の文献を研究することは文献学に同じいとしても、目的は古語や文献にあるのではなくしてわが国の道を知らうとする所にある。⁸⁹

その「道」を探求する「からごころ」を有しない条件は『万葉集』などに見られる語彙というものである。風巻は『日本文学史の研究』⁹⁰に所収された「古典研究の歴史」の中で以下のように述べている。

矢一は方法において国学と同一のものとしてのドイツ文献学を発見し、それによつて矢一は国学的な立場に一層の自信を持つことが出来たと思う。もちろん、国学は古神道の神学である点で、古典の本質を文学の觀念においてではなく、神典として把握している点で、本質的にドイツ文献学とは違つてゐるしかし文献による認識である点で方法的に似ているので、その研究方法の科学的な転移類似を見て、（中略）国学を日本の文献学という位に、両者殆ど同一のものにして行つてゐる。矢一

⁸⁸ 『明治文学全集』（落合直文 筑摩書房 昭和四十三年）所収。

⁸⁹ 『国学の本義』畝傍書房 昭和十七年。

⁹⁰ 角川書店 昭和三十六年。

は国学の民俗哲学をそのままに保存しながら、真実に国学の古典研究法を、近代科学的なものとして再生しうると信じたのである。

近代の国文学研究者は、近世国学者の成果を方法論の次元で「解釈」した。自らの学問に接続することで、国文学と近世国学の両方の正当化を行ったのである。

この他に、久松が主に契沖の学問に多くの名称が与えられていることに言及している。

- ・安藤為章「契沖は古今無比の歌学」（年山紀聞卷四、百家説林、続、上、九六）
- ・本居宣長「契沖ノ歌学ニオケル神代ヨリ只一人ナリ」（国歌八論古学論評）
- ・同「凡て古学」の道は此僧よりぞかつかつ開けそめける」（古事記伝 全集第一、p32）
- ・『国学ニ委ク古語ヲ発明ス』（諸家人物誌⁴⁵、巻七）

久松は本文で近世のこれら言葉の揺れについては言及するだけに留めており、その後の近代に流入した文献学の概念の説明へと移行している。『日本文学研究史』では「和学」「古学」「日本学」⁴³の三つをあげて「対象の意味」「態度や方法の意味」「客観的な意味」などで名称の変化を区別している。このように名称の問題をはじめとして定義づけが困難な近世国学者の範囲であるが、「新国学」を提唱した内野吾郎は広義・狭義の国学を設定してこの問題に取り組んでいる。その狭義の国学とは、近世国学における復古神道を目的とするものと述べている。この見方にのっとり、本節では契沖からのいわゆる国学四大人⁴⁴と周辺の人物たちを国学者で統一する。内野は近世末期から近代にかけての四大人の国学史はこの狭義の国学観に拠っていると述べている⁴⁵。

第二項 古典学時代(江戸期)の国学者

近世における広義の「国学」の定義は前項で述べたように定義づける。

近世国学の趣旨を一言で言い表せば、佐藤深雪氏が指摘している通り、「国学者達は、外来文化に侵されていない純粹の大和言葉さえ手に入れば、日本というアイデンティティは打ち立てられるはずだと考えた」⁴⁶ことに集約されるであろう。国学者達のアイデンティティは、「からごころ」によらない大和言葉こそが存在するという前提の下に立脚していた。そういった復古思想の具現化といっているのが、加茂真淵の『国意考』、本居宣長の『直毘霊』である。それらの業績について伊東多三郎は次のように述べている。

真淵は主として『万葉集』の研究から、外来思想に侵されない装美純粹な古代精神を明示した。宣長はそれより更に遡って、『古事記』の研究を完成し、わが民族的信仰のうちに道の本源を探索し、宣明した。⁴⁷

佐佐木信綱による「松坂の一夜」の逸話にもあるとおり、真淵が手を広げきれなかった『古事記』

⁴³ 別の条では「古学」が使われるなど一定しない。

⁴⁴ 「日本学」の呼称は『日本文学研究史』において久松が「また近代になつてから国学とともに日本学といふ名称も用ひられてゐるが、これは近世に於ける和学と同様に、日本を対象とする点が主となり、客観的に扱ふといふ意識が主になつてゐる。」と述べている。

⁴⁵ 荷田春満を含め賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤の四人を国学の四大人と称することがあるが、春満と契沖を入れ替えて四大人と称すこともある。

⁴⁶ 「比較国学」の意義と可能性―新国学の将来― 『國學院雜誌』八十三卷十一号 昭和五十七年。

⁴⁷ 『綾足と秋成と』名古屋大学出版会 平成五年。

⁴⁸ 『国学者の道』野島出版 昭和四十六年。

の研究に宣長は精力を注ぎ、『古事記』をはじめとした古典をとおして日本の大和言葉、そして民俗的信仰の存在を立証しようとした。一方でそれまで淫らな書物とされてきた『源氏物語』の本質を「もののあはれ」を知る説で物語の意識改革をも果たした。田中康二は著書の中で、宣長の「もののあはれ」論を「もののあはれを知るころ」として次のように解釈している。

人は感動する対象に巡りあつたときに感動するものであるが、宣長は重要な指摘をしている。
それは「感ずべきころをしりて」と述べているところである。対象と感動する心との間に、それを認識する働きというものを想定していることである。物事が直接的に心に働きかけて情緒を生み出すのではない。それを認識する主体としての心があつてはじめて情緒が発生するというのである。ここには情緒が発生するシステムが構想されている。そこに宣長は感動の理知的側面を見出しているのである。⁸²

「もののあはれを知る」ころ、つまり認識する働きの存在を想定したことが、宣長の重要な事績だとしている。宣長のこういった指摘が当時として先駆的であり、後に述べるように近代的様相を帯びていたことが、国文学と国学の連結の一つの要素となつたと考えられる。風巻景次郎も「もののあはれ」論の史的限界（昭和十二年）の中で、宣長以前の様相を「事実、宣長以前の儒者達が倫理的立場ばかりから詩的物語等の論を行なつたことは顕著な出来事であつて（宣長は）物語は「もののあはれ」を表現の対象とすることを実証的に論断し、（中略）確認したことがいかに近代人に適正の感を与えたか」と当時の状況を総括して述べている。それまでの国学の古典的手法であつた出典論・出典研究を宣長は推し進め、実証主義的手法にまで昇華させる。しかしこの実証主義的方法には時代的な限界があつた。

その弟子の一人であり鈴屋の後継者本居太平は和歌山に移住し宣長の思想（鈴屋の学）を広めることでこれに無批判的に受け継ぐ。大秀は宣長の没後の門人であり、諸平は太平の門人であるから、両者ともに鈴屋学派である。当時の文献実証主義の系統がそのまま受け継がれるということはその限界もまた同様に受け継がれるということである。やがて近代に至り、芳賀矢一⁸³がドイツの文献学的手法を日本文献学の中で再編成を行い、近世国学の性質と方法を改善しながらもその大部分を受け継ぐこととなつた。近世国学から受け継がれた文献実証主義はその限界を無批判に受け継ぎつつ、再生産されていく。

第三項 国文学時代（明治以降）以降の国学者

『国文学 解釈と鑑賞』の平成四年八号の特集には「続・古典学者の群像」と題して近代の昭和戦前期までの古典学者の各人物論、一覧などが掲載されている。ここでは国文学者、国語学者、民俗学者といった名称の肩書が使われ、国学者という文字はみられない⁸⁴。芳賀矢一によつてドイツ文献学の方法論が国学の近代化、国文学という科学的研究へとすすんだことは、同時に国学の間接的な否定ともなつた。なぜなら、近世の国学は歌学からはじまり注釈学、国語学、史学、教育学、政治思想学といった総合的学問として方法論を備えていたにもかかわらず、古語や古文獻、古文化といった近世

⁸² 『国学史再考—のぞきからくり本居宣長—』 新典社 平成二十四年。

⁸³ 「日本文献学」『芳賀矢一遺著』（富山房 昭和三年）所収の第一章で「所謂日本文献学とは japanische Philologie の意味で、即ち国学の事である。（中略）国学者が従来やってきた事業は、すなわち文献学者の事業に外ならない。唯その方法に於いて改善すべきものがあり、その性質に於いて拡張すべきものがある。」と芳賀は言及している。

⁸⁴ 前号の「古代から近世まで」においては使われている。

以前のみに価値をおく偏狭性もまた持ち合わせていたからである。久松はその偏狭性を次のように批判していた。

（国学において）日本の文化の性質を明らかにするために、他国の文化と比較することは必要であり、かういふ比較によつて日本的なものを明らかにし得る点もあるが、批判の基準になると日本を第一に置いてその点から他を非難するといふ点が見られるし、これは国学の学問的性格として今日批判されてゐる点である。（中略）国学に於ける文学研究が古代の文学に限定して、その中世近世への展開を見ようとしなかつたことや、日本と外国との比較の場合に、日本をはじめから高い位置において見ようとしたことは国学成立の歴史的制約もあらうが批判せられるべきである。

その総合的学問の性格が近代は上田万年といった国語学、または文献学者、近代後期は歴史学者、津田左右吉や哲学者、和辻哲郎といった他分野からの国文学への言及が席捲し、国文学単独としての研究方法の樹立は常に方法論としての他分野の科学的研究方法を前提にしてきた。

戦前、柳田国男や折口信夫の柳田学、折口学が左記に挙げたように国文学の中に方法論として流入を行う。特に折口学は顕著であり、柳田が近世国学の復古神道を初期は区別していなかったのに対し、折口⁵¹は文芸や言語、民俗を中心に宗教、思想、歴史、社会学を統合して論を展開した。これは近世国学の学統を継承することに同一であり、久松のいうところの「新国学」としての方法論であつた。柳田は戦前「新国学」という用法を多用せず意識的に使用し始めたのも昭和十年ごろからである。その具体的提唱は戦後の『新国学談』三部作となる。折口もまた同様に「新国学」としての自覚は戦後になるが「新国学としての民俗学」では以下のように言及している。

国学は今正に、新国学を名のつて、鮮やかに出直す時が来た。新国学と言う名にも歴史があり動機を別にし三次の運動があつた。今のは三度目で柳田國男先生の為事に対して久松潜一さんが与えた名称かと思う。民俗学の方法によつて、古代存続の近代生活様式の所由を知ろうとするのである。

過去の国学が当然到達しようと仰望していた目的もそれである。⁵²

この「新国学」を定義していた久松は「日本文学史」的研究を国文学の「伝統」に位置づけるべく奔走していた⁵³が、自身もまたその中に位置づけられていくのは平林一が指摘するとおりである。

芳賀矢一などを近世国学の「伝統」の中に位置づけていった久松であつたが、今度は自分自身がその「伝統」のなかに位置づけられていくことになる。たとえば国語学者山本正秀は、新国語学を論じた1942年の文章で、「近世国学が対内的必要性からのものであつたのに対しては、新国学は更に対外的の必要に基づく」として「今日の「新国学」或は「日本学」の樹立を現代的必然として私は歓迎迎へる」と記し、「新国学の先駆として明治大正期における代表的国学論者として芳賀矢一博士を、現代における新国学の主なる提唱者として久松潜一博士を挙げ」ている。⁵⁴

⁵¹ 折口の国学観は『国学ひとり案内』（『國學院雑誌』二十六卷十二号大正九年）などに見られるが戦前のものは少ない。

⁵² 『折口信夫全集 十六卷』中央公論社 昭和三十一年所収。

⁵³ ただし、戦中期における発言であるということを踏まえつつ理解する必要がある。

⁵⁴ 「国文学者の抵抗——歴史社会学派」『戦時下抵抗の研究』——キリスト者、自由主義者の場合——『みずす書房 昭和四十四年。』

このように近代以降の国文学の方法論は近世国学の方法論、すなわち文献学の萌芽として成り立ちつつも、その偏狭性から近代化の中で大幅な改変を求められた方法を意識されながら進められたといつてよいだろう。

第三節 『竹取物語考』解釈の問題点

本節では『竹取物語考』が現代の竹取研究の視点からモデル論に値するものを展開した点とその継承についての問題点を中心に述べる。

第一項 モデル論と出典論

解釈の問題点に言及する前に諸平の「モデル論」と近世国学者の「出典論」の相違について述べたい。本節で使用する「モデル論」は諸平が「竹取物語考」の中で述べた「五人の貴公子」を『日本書紀』の記事から比定して述べた一連の論であり、出典論は契沖、大秀以下、『竹取物語』の各種の語彙、あるいは展開について各種文献が示すとされる出典について述べられている論である。モデル論が出典論のなかに包含されるという見方が一般的であると考えられるが、その見方に疑義を呈したい。

諸平が『考』でモデル論を比定する以前に契沖は夥伴大納言の名前にて言及⁸³し、大秀は種々の文献にこれらの「固有名詞」が見られることを指摘⁸⁴している。しかし、諸平に先立つて記述を指摘した契沖及び大秀と、諸平の大きな違いはそれが注釈的態度にとどまるか否かということである。奥津が指摘するように近世国学者たちの成果は「文献学的な注釈・考証」につきていたのである。こういった注釈にとどまることを諸平は「先輩、唯、文章にのみまづはれて、空しく見過ごしたるは、口惜し」と嘆き、「かれ、今五人の伝を始めて、古伝説と思しき事どもを、抜き出でて、下文に解き試み」るとしている。そこで諸平は五人の貴公子の比定を「諷刺」だと「解釈」し「作品論」への端緒を踏み出した。

此物語、即ち其五人の上に亘れる書にして、色好と云はるゝ限と、書けるは、執政と云はるゝ五人を然書なしたるなり。(中略) 天下の執政ながら、色好なるを、誹りて作れる書なればなり。

つまり今日的な出典論の中にあるモデル論という包含関係は『考』と『河社』『解』では成り立たず、寧ろ近代により近い「作品論」の俎上に並んでいくようなものだったのではないか。

また、奥津は諸平の「諷刺」の指摘について「時代的限界」から近代的な「作品論」にはなりえないとしている。「背後に史実を探り、(中略)『竹取物語』の価値を見よう」とする点を「現代的な意味での作品論」と認めていないのである。また、それを「古代の文献によって古代の実相を明らかにしようとする国学の姿勢」からくるものだと考えている。しかし、近世国学だけがそういった「姿勢」を持っていたのか。近代以降の研究史上においてそういった奥津が認めない「姿勢」を一律的に認めずに来たのであれば、諸平のモデル論は顧みられなかったはずである。つまり、奥津が指摘するような諸平のモデル論だけが成果として承認され、研究史上にのぼったのではなく、「姿勢」そのものが研

⁸³ 契沖は「河社」のなかで五人の貴公子のうち「夥伴大納言」のみ「かくやひめをおもひかけゝる五人か中のひとり、大ともの大なこんみゆきは、文武天皇の御代の贈右大臣夥伴宿禰御行、これをおもへる歎。」と記述している。

⁸⁴ おなじく『竹取翁物語解』で五人のそれぞれの名義が見られる「日本文徳天皇実録」「続日本紀」「続日本後記」「新撰姓氏録」を挙げて検証している。同本文については、補足資料参照。

究史の中に取り入れられるものであったのだと考えられるのである。

第二項 奥津春雄による加納諸平『竹取物語考』観

本項では戦後竹取研究の帰結の一つである奥津の『竹取物語の研究―達成と変容―』についての諸平の位置づけを探る。この『竹取物語の研究―達成と変容―』についての書評では、小嶋菜温子³³が『竹取物語』を「本格的かつ総合的に論じる」「画期的な書」であり、「今後の『竹取物語』研究のための重要な礎石となる」と述べ、三木雅博³⁴が中国文学の立場から、「先行の研究が丁寧な網羅され、それぞれの研究の持つ有効性や問題点・限界について客観的な把握がなされている」と評価している。また、関根賢司³⁵は「営営と持続された研究・試作・執筆の軌跡は、そのまま半世紀に亘る竹取物語研究史の同時代史であった」とまでいう。こういった評価から、奥津の竹取研究の現代における影響力を考えた際、諸平の研究が取り上げられることに關して、改めて諸平の竹取研究史の中での位置づけの重要性の可否について考えなければならない。

三章で述べたように、加納諸平に対する研究は和歌の側面が強く、国学者としては『竹取物語考』以外に目立った著書も残されていないため、諸平の国学者としての側面は見えにくい。そんな中で戦後から平成にかけて多くの竹取研究の論文を発表した奥津は、その論の中で田中大秀の『竹取翁物語解』とおなじく加納諸平の『竹取物語考』を積極的に引用している。

特に諸平のモデル論を現在積極的に評価している奥津の「五人の求婚者の機能」(『竹取物語の研究―達成と変容―』所収)は諸平の比定モデル論を「継承し」「ほぼ承認されてきている」としている。同書の「研究史概観」でも以下のように諸平に言及している。

加納諸平の『竹取物語考』が、五人の求婚者として、『持統紀』十年の記事にある、丹比真人嶋・藤原不比等・阿倍御主人・大伴御行・石上麻呂を指摘したことなどは、やや修正を加えながら、今日もほぼそのまま承認されている貴重な成果であるものの、

奥津以外では、西郷信綱³⁶も五人の人物のモデル論を承認している。しかし、奥津がその論拠として挙げている三つの校本全集のうち「承認」しているといえるのは、野口元大校注の日本古典集成のみである。他に挙げられた日本古典文学大系、日本古典文学全集については明らかに田中大秀の『竹取翁物語解』時点で挙げられた三人、すなわち阿倍御主人、大伴御行、石上麻呂の实在の人物からの名称のみの借用であり、加納諸平独自のモデル論の見解ではない。

「くらもちの皇子」については、加納諸平の「考」に、藤原不比等のことで、その母が車持氏の出であるからだとするが、車持をクラモチとよむことには確証がない。(中略)作者は、それら(引用者注…壬申の乱における功労者)の名を借りてこの物語に利用したのであって、無理に实在の人名と一致させる必要はないのである。³⁷

³³ 「書評」『日本文学』四十九巻九号 平成十二年。

³⁴ 「書評」『国語と国文学』七十八巻二号 平成十三年。

³⁵ 「書評」『国文学研究』百三十四号 平成十三年。

³⁶ 「加納諸平は「竹取物語考」のなかで、車持皇子・石作皇子がそれぞれ藤原不比等・丹比島であることを考証しているが、承認さるべきであろうと思う。(註釈引用)」と述べられている。「竹取物語の文学史的位置」『日本文学』七号 昭和二十四年。(日本文学研究資料叢書『平安朝物語』所収。)

³⁷ 「補注」『日本古典文学大系 竹取物語』阪倉篤義校註 岩波書店 昭和三十二年。

加納諸平は『竹取物語考』において、石作の皇子は丹比嶋真人のこと、くらもちの皇子は藤原不比等のこととしているが、根拠薄弱で用いるにたらない。⁸²

日本古典集成の場合も以下のように確たる論証がなされたとはいいたい。

（諸平のモデル論は）少なからず苦しい憶測の積み重ねというのが、わたくしの正直な感想である。しかし、五人のうち、たった一人ということになると、やはり何とか考えなくてはなるのは事実であり、おそらく『竹取物語』の作者にあつては、その思いはいっそう痛切であつたろうから、案外こんな苦しいこじつけもしたのかもしれないという気もする。⁸³

奥津は大秀の『竹取翁物語解』では田中道麻呂、鈴木腹からの口伝、

田中道麻呂主云「此人々、統紀に見えたり。みむらじは、源氏物語におほしと有に従べし。みむらじとは、後人、ご主人を訓かねて、心当てに訓付たるべし。石上のまろたかは、一本に、まろただと有ぞよき。麻呂は名、ただは唯にて、下に続く詞なり」と口自云れしを、鈴木氏、聞つとて、語られき。此説まことに宜し。書紀に、「冬十月己巳朔乙酉、右大臣丹比真人、資人百二十人賜。正廣肆大納言阿倍朝臣御主人・大伴宿禰御行、並八十人。直廣壹石上朝臣麻呂・直廣式藤原朝臣不比等、並五十人。」とあるを見れば、此三人の名を借たるなりけり。

の部分を用いている。ここでの大秀は「實在の三人の名を借りただけ」と解釈したと、奥津は考察している。

一方、『竹取物語考』ではこれに対して、

此物語、即ち其五人の上に互れる書にして、色好と云はるる限と、書けるは、執政と云はるる五人を、然書なしたるなり。丹比真人島公を、石作王といひ、藤原朝臣不比等公を、車持皇子と書けり。

といった部分で二人の皇子の比定を取り上げた部分を引用してモデル論の説明をはかっている。諸平があげる論拠については、奥津は繰り返していないが、日本古典集成および三谷栄一⁸⁴による論考をもとにまとめるとおおよそ以下のである。車持の皇子は藤原不比等の母が車持氏の出自を持ち、天智天皇の落胤であつたという説と合わせて、不比等自身が車持の皇子と呼ばれていた可能性は十分ありうる、というものである。石作皇子のモデルとして挙げられる丹比真人嶋についてはここまでの四人が實在の人物であるということから、残り一人が架空の人物であるとは考えにくいとしている。「新撰姓氏録」での記述から、石作氏と父である多治比古王の母つまり祖母もしくは乳母（丹比氏）が同祖であるという由縁があることがわかる。そして不比等と同じく、乳母によって育つたと推定すること、丹比真人嶋が石作の皇子と呼ばれていたのではないかと言及している。

奥津が『竹取物語考』を重要視して評価する側面は、先にも述べたようにモデル論、そして原竹取に関して先駆的に論じた点にある。

⁸² 「解説」『日本古典文学全集 竹取物語』片桐洋一 小学館 昭和四十七年。

⁸³ 『新潮日本古典集成 竹取物語』野口元大校注 新潮社 昭和五十四年。

⁸⁴ 『物語文学史論』有精堂 昭和四十年。

その漢文竹取先行説については、

天保（一八三〇～一八四四）末年ごろ、加納諸平が、その著『竹取物語考』において、文武朝成立説（従つて原本漢字表記説）を唱えた。（中略）この諸平の主張が、普通、漢文竹取先行説の嚆矢として、しばしば引用される。⁸⁵

と、これまでの研究を概括したあとでその説について細かく精査を行っている。

しかし、注意しなければならないのは、諸平の主張が、今日の漢文竹取先行説とはかなり異質のものである点である。『竹取物語考』の「総論」に述べられているのは、要するに、モデル論に基づく成立論及び主題論であつて、文武朝成立を主張した結果、当然の成行きとして、原書が漢字表記（漢文体とは言っていない）であつたろうと推定しただけである。⁸⁶

この諸平の漢文竹取先行説はあくまでモデル論の延長線上であり、今日の漢文竹取先行説とは本質的な理解において差異がみられるというものである。モデル論について奥津は先駆的業績と評価しているが、漢文竹取先行説の先駆的議論とみなすには問題があると見ている。『竹取物語考』の「総論」に述べていることを引用して、

持統・文武朝の歴史的事実を、文飾を加えて伝記風に書いたのが原『竹取物語』で、これを書き直し、歌を加えて、現存『竹取物語』ができたというのである。そして、その根拠は、前述のように、五人の名が、持統十年から大宝年間へかけて正史に見える顯官である⁸⁷

というように、諸平がモデル論において五人を比定した『日本書紀』⁸⁸の記述からその成立時期を導いたことを評価している。この論述の仕方は、諸平が「物語中の人物・事件がみな歴史的事実である（あるいは、歴史的事実に対応する）」ことを重視した国学者としての態度が招いたものであり、「時代的境界」であると言及している。そのうえで「五人の求婚者の機能」の結論として二人の皇子の比定には若干の疑問は残りつつも、断定を避けてはいるが可能だったのではないかと私論を述べている。しかし、ここにおける問題点は、そもそも加納諸平の諸説の引用が必要だったのかという点である。

奥津は結論においては結局のところ日本古典文学大系などと同じく皇子二人の比定を可能性の段階にとどめている。

大秀と同じく諸平が文献実証主義をとる鈴屋学派であること、奥津が諸平を大秀同様に重要視した理由がここにある。すなわち、諸平の師弟関係を踏まえ、大秀と同様の価値があると独自に判断したのではないか。諸平の研究への称讃は和歌研究を除くと、わずかしら窺い知ることとは出来ないが、多くは当時の研究史的意義が踏まえられないまま絶賛するという流れをとっている。奥津がそのような流れをそのまま踏まえたとは思えない。『竹取物語考』の出版事情にあえて触れないことから、近世

⁸⁵ 注 5 に同じ。

⁸⁶ 注 5 に同じ。

⁸⁷ 注 5 に同じ。

⁸⁸ 諸平が、根拠の一つとして挙げる『日本書紀』の「持統天皇十年十月」の記述は「冬十月の己巳の朔乙酉に、右大臣丹比真人に、資人百二十人賜ふ。正廣肆大納言阿倍朝臣御主人・大伴宿禰御行には、並に八十人。直廣壹石上朝臣麻呂・直廣式藤原朝臣不比等には、並に五十人。」というものである。

文献資料、すなわち国学者の業績として先駆的であるという評価を定めさせたかったものと思われる。

第三章 研究の達成及び課題点

本章では本論における達成とその後の課題点について述べる。

第一節 研究の達成

本論文では前章までにおいて、諸平の『竹取物語考』が現代的なモデル論を提唱したことについて、近世国学者の方法論的次元から唱えられたと意識し、捉え直すべきだということを主張してきた。現代の竹取研究で重要視される奥津春雄をはじめとした諸研究者が言及してきたように、『竹取物語』が多くの説話に近い話型を持ちつつも、出典離れにもみえる独自の「竹取説話」ともいべき枠組みをもつこと。そうして、『竹取物語』はその出典探しに研究の主流が置かれ続け、近世から現代にまで断絶を起こしつつも、ながらく『源氏物語』とその周辺を平安文学の中心と見る文脈が続いた。そのことで、『竹取物語』は説話と物語の接続地点としての定位を意図的に課せられ、研究の焦点が『竹取物語』が「いつ物語の《親》として生み出されたのか」という点に収束していく読みしか与えられてこなかったのではないか。

そしてそれらは、近代の国文学研究黎明期と、久松ら新国学研究者たちが戦前から戦後にかけての研究態度が招いたと考えられる。西郷信綱は「日本的といふことに就いての反省——国文学の新しい出発に際して」の中で以下のように述べている。

久松は一九二〇年代に日本文学評論史の講義をはじめ。その内容はちに主著『日本文学評論史』として結実するのだが、その過程で「日本文学」あるいは「日本文学評論」という枠組みを、歴史的に、あるいは時間的に、いくつかのキーワードで编制しなおす作業がなされていた。久松の師である芳賀矢一は、一八九〇年に『国文学読本』を著し国文学の確立を唱えた。しかしながら実際は国文学として各作品を時代順に配置したに過ぎなかった芳賀の作業を一步進めて、それら作品群に貫通する「精神」を見出そうとしたのが久松であった。さらに、後述するがこれは文学・評論という枠組みのみならず、日本精神という名の日本文化論を時間的に整序することでもあった。そして芳賀がヨーロッパから学んだ文献学的手法をも用いてこういった作業を精緻化していったのである。⁸²

芳賀が進めた国文学作品の再配置は歴史化とでもいうべきであろう。古代から近代にかけての作品の取捨選択を行い、「国文学」を推し進めた。その研究の根底にあったのが、その師である小中村清矩、本居豊穎といった国学派であることは言うまでもない。小中村清矩は明治二年、東京大学の前身である開成南校の助教授であり、本居大平の養子である内遠の弟子であった。芳賀は大学院で清矩の指導を受けることとなる。その芳賀の業績をもつて久松はさらに日本文学の「精神」を推し進め、「幽玄」や「さび」といった言葉を生み出した。そのことについて久松自身も言及している。

一体明治以降の国文学は明治二十三年に、上田博士の国文学、芳賀博士などの国文学読本、三上博士などの日本文学史などが刊行されてから、次第に形成されてきたのであり、それ以後上田博士によって国語学、三上博士によって国史学を開拓発展せしめられたのに対して、芳賀博士によって国

文学は次第にその学的組織を与えられて来たのであるが、こういう国文学の母胎としては近世国学を挙げなければならないのである。近世国学はその学的性格としては日本の立場にたつて日本的なものである。そして純粋日本文化を開明するにあつたのである。そうして純粋日本文化という所から、外来文化の影響をうけない古代日本文化の開明を主とするようになり、古代学の性質を有してきたのである。²⁰

このように、久松が新国学と称した自身も含める民俗学は『竹取物語』にはうってつけの方法であつたと思われる。それは柳田が「竹取翁考」で著した以下の数点で如実に表れている。

竹取物語が純然たる一個の創作で無く、世にある説話を採つて潤色したものだといふことは、もう何人かの註釈家の言に由つて、是を否み得る人は無くなつて居ることと思ふ。今日問題にしてよいのは其筆者の働き、即ち何れの部分が新しい趣向の添附であり、どこが其時代に既に行はれて居たものの踏襲であつたかの境目如何であらうが、作の表面に現はれて居るだけのものは、之をはんべつすることもさまで困難では無い。比較的面倒なのはその新しい序説法によつて、わざと置きかへられ、又は隅の方へ押し遣られてある部分が、前にはどういふ形を以て行はれ、又どれ程の重要性を持つて居たらうかを知ることである。

然らば何れの部分に、竹取物語の文芸としての目途があつたか。筆者その人の働きといふものは、果してどの点に現れて居るのか。斯ういふ疑問があるなら私には容易に答へ得られるそれは他を捜して類型のない部分、もしも一つ一つ探すのが厄介とあらば、主としては五人の貴公子が、無益に妻問ひをして結局は蹉跎と落胆とに終わったといふ、あの面白い五通りの叙述である。是には一つ一つ歌と一種の口合ひとが附いて居て、目先をかへることに十分の力が用ゐてある。さうして此書以外には、前にも後にも斯ういふ類の話は無いのである。私たちは是を説話の変化部分、又は自由区域と呼ぼうとして居る。²¹

前述したとおり柳田は『竹取物語』を創作と説話にわけて指摘し、その創作の部分が五人の貴公子のくだり、すなわち難題求婚譚であるとした。説話、即ち口承文芸の話を内包する『竹取物語』は国文学を語る民俗学者たちにとって、好都合な作品であつたのである。

そのように考えると、『竹取物語』が研究史上で「物語の出で来はじめの親」として重要視される時期の忖意性が見えてくる。その忖意性は主に「文学史研究」と「新国学研究」について表れているのである。特に「新国学研究」については、方法論としてその後の竹取研究の中心となることから、いかに竹取研究が、国文学研究外部の情勢に左右されてきたかが見て取れるだろう。もちろんこれらについて、先行研究者たちが無頓着であつたわけではなく、民俗学派の三谷栄一も「国文学における民俗学的方法とその反省」の中で次のように述べている。

つまり、日本民俗学と国文学における民俗学方法とは、異なつた次元で、異なつた対象を扱っているものであつて、そこには領域的に広く重なるものはあつても、その概念的な主体と対象とは全く異質なものなのである。

²⁰ 久松潜一「国学・文芸学・日本学」『理想』一二巻九号 昭和十三年九月。
²¹ 以上、柳田国男「竹取翁考」『国語国文』四巻一号 昭和九年。

この異質なものを、その民俗学という共通するものによって統一するところに（中略）誤解が生じるのである。それは多分単に外部的な批評にとどまらず、内部的にも幾つかのジレンマを生んでいるようである。⁷²

文献学が「方法としての」文献学として国文学の「論じ方」の「方法」に変化していくのと同様に、折口は柳田の個としての民俗学という学問から国文学の「方法としての」民俗学に移行していったことを述べたと三谷は言及している。

「方法としての」民俗学とはどういうことか。そして、その考え方は竹取研究の中にどういった影響を及ぼしたのか。

折口は「日本文学研究法 序説」の中で以下のように言及している。

日本文学研究上における民俗学の交渉は、第一は、その発生状態を見ることにある。併置に、その発生を追尋するにとどまらず、極めて広く関与する所がある。だが一口に言へば、主として、様式方面に触れる面が多いやうである。これについては尚言はなければならぬ多くの事がある。⁷³

折口がいう民俗学の「交渉」の最も深い目的は「発生」である。つまり、「文学の発生」という事象を内包する可能性のある『竹取物語』が重要視される運びは実に自然だったといえる。

すなわち、『竹取物語』研究は、近代にかけて国学が「方法としての」文献学として国文学の中にその命脈を保ったのと同様に、民俗学が「方法としての」民俗学として国文学研究史の一翼を担ったことの証左としてある。その恣意的な研究史に留意しつつ、今後の竹取研究は切り開かれていかなければならないのではないか。

第二節 今後の課題点

以上のように竹取研究史の課題を浮き彫りにしたが、なお問題点は残る。一つは柳田や折口といった民俗学者自身の研究史という視点である。久松を含め、昭和前期に至るまで、『竹取物語』はその話型の性質から、その全体像として研究が進められることがなかった。小嶋菜温子はそうした面からも『達成と変容』を高く評価していたが、同時にそれは『竹取物語』の内容そのものの語りにくさを意味する。本論では『竹取物語』の内容そのものに踏み込むことなく、研究内容の背景としての整理に留まったため、今後はとりわけ諸平及び大秀の『竹取翁物語解』のテキストを引用しつつ、その論旨をより踏まえた研究を心掛けたいと考える。

おわりに

西郷信綱は前述した著作の中で以下のように述べている。

これまでの国文学会の思考様式を特徴づけてきた顕著な標識の一つは、日本的なるもの（国民性といふ形而上学的概念に、文学事象の最後の説明根拠を求めようとしたことである。万葉集を研究するものも、源氏物語を研究するものも、新古今集を研究するものも、芭蕉を研究するものも、み

⁷² 『国語と国文学』四十二巻十号 昭和四十年。

⁷³ 「日本文学研究法 序説」『折口信夫全集 第七巻』。

な、「ますらをぶり」だとか「もののあはれ」「幽玄」「寂び」だとかいふ精神タイプをそれぞれ抽出し、いろいろと学者的あつらひを施したうへで、さてそれらが日本的なるものであり、国民性の表現でござる、といふ風に説明するのが公式であつた、そしてただそれだけであり、それ以上の何ものをも具体的には殆んど説明してくれようとはしなかつた。⁷⁴

西郷がこの論を発表したのが戦後まもなくという事情を勘案することは必要であるが、国文学、とりわけ、中古文学を取り扱う際にその国民性の表出を見えるという「読み」の態度は、現在でもその色合いが見てとれる。そうした色合いを払拭し、『竹取物語』を真摯に読み解くという態度を達成するためには何ができるか。

小嶋菜温子がまとめた展望⁷⁵ではジェンダーや歴史学といった既存でありながら今までその枠組みで捉えられてこなかつた学問分野で『竹取物語』を捉えなおすべきだという論と、『竹取物語』の近現代への受容という二つの側面が語られている。また、小嶋の近年の論文は先ごろ修復が終わつた『チエスター・ビーティー・ライブラリイ所蔵 竹取物語絵巻』に関する研究などから、長らく諸本の不足が唱えられていた竹取絵巻の研究などの側面も挙げられるだろう。このうち近現代の受容というテーマは、本稿でも幾度となく傾きつつも、その範囲の煩雑さと諸研究者による定義の違いが大きく、本格的に活字化するには至らなかつた。その点においては本研究の中心となるべき核はいまだ備わつてないともいえる。その核を見定めるべく、今後も国文学史の中における『竹取物語』の位置づけというテーマを探っていきたい。

※引用箇所は一部旧字体を新字体、旧仮名を新仮名に改めた箇所がある。なお、引用文傍線はすべて筆者によるものである。

⁷⁴ 「日本的といふことに就いての反省——国文学の新しい出発に際して」『国語と国文学』 二十三卷三号 昭和二十一年。

⁷⁵ 小嶋菜温子「中古物語の軌跡と展望」『竹取物語』『国文学解釈と鑑賞』六十八卷二号 平成十五年。

○補足資料① 田中大秀『竹取翁物語解』五人の貴公子註釈関連

※底本…『竹取物語全評釈 古註釈篇』上坂信男 右文書院 平成二年

▽石作皇子

凡皇子の御名の例、文徳実録巻一に、「先朝之制每皇子生。以乳母姓為之名焉。故以神野為天皇諱」と見えたり。石作、車持ちなどは、乳母の姓なるよしに取るなり。石作とせしは、仏の石鉢を偽作れる事云むとて設たる名なり。姓氏録に、「石作連火明命六世孫建真利根命後也。垂仁天皇御世。奉為皇后日葉酸媛命作石棺献之。仍賜姓石作大連公也。」とあり。続後記に、石作王と云見ゆ。

▽車持皇子

姓氏録に「車持公、上毛朝臣同祖。豊城入彦命八世孫射る狭君之後也。雄略天皇御世。供進上興。仍賜姓車持公」とあり。続紀に、車持朝臣の人多く見ゆ。同姓歟。車をクラと称は、ルマの切ラとなればなり。さて、くら持の皇子と云名を設たるは、くらは、闇の意に取て、偽し給ふによりて、くらと思依れるなるべし。偽なきをあかき心とも、闇き事なしとも云、又博奕する者の道理ならぬ事するを、くら事と云、采に操を構て、人を謀をくら采と云とぞ。

▽右大臣阿倍御主人

○阿倍は、姓氏録に「阿倍朝臣孝元天皇々子大彦命之後也」と見え、天武紀に、「十三年。阿倍臣賜姓曰朝臣」とあり。

○みうしは御主人なり。其を、源氏物語に、おほしと有も猶誤なり。御は、後世、おほん、おん、など呼故に、おうし、おほしなど訓ひがめ、みむらしは、御うしと書たるを、おむらしなど写し、色々混乱してむの入たるに、又うをらと誤たるものなり。師云、「御主人は、美宇志と訓べし。古事記に、「丹波比古多々須美知能宇斯王」と有を、書紀に、「道主」とあり。奴志は能宇志の切たるにて、大人なり。此人の姓、天武紀・持統紀には、布勢朝臣とありて、持統天皇十年の条に、始て、阿倍朝臣とあり。続紀には、「阿倍布勢朝臣御大人」と書る処もあり。布勢朝臣は、姓氏録に、「阿倍朝臣同祖」とあれば、此人の族、もと布勢なりしを、阿倍に改られしなるべし」と云れき。続紀に、「文武天皇四年八月丁卯。阿倍朝臣御主人。大伴宿禰御行。並授正広参褒善政也。」また、「大宝元年三月甲午。授大納言正広参阿倍朝臣御主人正從二位。中納言直広壹石上朝臣麻呂正正三位。同日以大納言正從二位阿倍朝臣御主人為右大臣、中納言正正三位。石上朝臣麻呂為大納言。同月壬寅賜右大臣從二位阿倍朝臣御主人純五百疋・絲四百絢・布五十段・鍔一万口・鐵五万斤・備前、備中、但馬、安芸国田二十町。同七月壬辰。勅先朝論功行封時。賜大伴連御行・阿倍普勢臣御主人云々各一百戸。同三年閏四月辛酉朔。右大臣從二位阿倍朝臣御主人薨。遣正三位石上麻呂等弔賻之。難波朝左大臣倉梯麻呂之子也。」とあり。当時左大臣は、多治比嶋公なり。御主人公は、左大臣には昇らねば、次下に、右大臣と有に從て、此も改。

▽大伴御行大納言

○大伴は、姓氏録に、「大伴宿禰高皇產靈尊五世孫天押日命之後也。初天孫彥火瓊杵尊。神駕之降也。天押日命大来目部立御前降于日向高千穗峰。然後以大来目部為天靱負部。天靱負之号

起於此也。雄略天皇御世。以天靱負賜大連公。奏曰く。衛門開闔之務於職已重若一身難堪望与愚兒語相伴奉衛左右。勅依奏是大伴・佐伯二氏掌左右開闔之縁也。」と見え、天武紀に、「大伴連・佐伯連姓曰宿禰。」とあり。

○みゆきは、御行なり。統紀に、「大宝元年正月己丑大納言正広参大伴宿禰御行薨。帝甚悼惜之。遣直広壹藤原朝臣不比等。就第宜詔贈正広式右大臣。御行難波朝右大臣大紫長徳之子也」とあり。

▽石上麻呂中納言

○いそのかみは、姓氏録に、「石上朝臣神饒速日命之後也。」とあり。師云、「此細書は、後人の、旧事に従て書加へたるものなるべし。連公と、公字を添えたるは、例なき事にて、旧事記のみ然あるなり。さて物部連麻呂は、天武紀に出たれば、朝臣の姓を賜へるは、信に此人麻呂の世なり。又、石上と改まりし事は、書紀に見えざれども、同卷の末、又、持統紀に、「石上朝臣麻呂」と見え、次に、十八氏を挙げたる処にも、石上とあれば、是も此人の世に改まりし事、明けし。さて、石上は、石上の神宝、物部氏の掌て、氏を石上と改、住地も即石上に在けむによれり。」と云れき。

○麻呂は統紀に、「元正天皇養老元年三月癸臣麻呂薨。帝悼惜焉。為之罷朝。詔遣式部卿正二位長屋王左大辨從四位下多治比真人三宅麻呂。就第弔賻之。贈從一位。右少辨從五位下上毛野朝臣広人為太政官之諫。式部少輔正五位下穗積朝臣老為五位已上之諫。兵部大丞正六位上当麻真人東人為六位已下之諫、百姓追慕無不痛惜焉。大臣泊瀬朝倉朝庭大連物部目之後。難波朝衛部大華上宇麻乃之子也」とあり。中納言なりし事は、上に出せる大宝元年三月甲午の紀に見えて、其日御主人公は、右大臣に麻呂公は大納言に昇進たり。

補足資料②「竹取物語」主要研究論文リスト（平成十二年～平成二十三年）

※国語教育、国文学、その他書評の三分野にわけて記載した。

○国語教育

平成十二年

「アニメシオンで古典を楽しむ。」―「竹取物語」探偵団」中村純子 横浜国大国語教育研究

平成十三年

「総合的学習を取り入れた古典文学の指導―「竹取物語」（中二）の読みをどう組織したか」岩田道雄
月刊国語教育

「目的や必要に応じて音読や朗読をすること」前田壮一 実践国語研究

平成十四年

「翁の物語としての『竹取物語』―“古典”に親しむ”ために”竹村信治 国語教育研究
『竹取物語』と『今昔物語集』の比較による読解の授業」森田恒有 横浜国大国語教育研究

平成十五年

「古典学習への興味・関心を高める工夫―『竹取物語』かぐや姫ってどんな人なの？の指導と評価を通して」清水静子 上越教育大学

「授業に役立つ古文解釈のヒント4「思ひのごとも、のたまふ物かな」―文脈の理解」山田潔 月刊国語教育

平成十六年

「入門期としての中学校古典教育を考える―『竹取物語』『枕草子』『徒然草』和歌教材で古典に親しむ態度を養うために」菊地奈樹 言文

「増淵恒吉の「国語講座」に学ぶ1 竹取物語の指導」小林国雄 月刊国語教育

平成十七年

『竹取物語』に見る人間模様1かぐや姫の出現と翁の繁栄」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様2世代間の結婚観の相違」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様3求婚者への難題提示の意味」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様4心まで薄汚れた石作の皇子」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様5外面の豪華さを求める車持の皇子（一）」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様6外面の豪華さを求める車持の皇子（二）」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』に見る人間模様7 外面の豪華さを求める車持の皇子（三）」飯塚誠 月刊国語教育

『竹取物語』における心の交流―高校教科書採録箇所についての提案」有馬義貴 早稲田大学国語教育研究

平成十八年

「授業展開の工夫 定時制高校における古典の授業―『竹取物語』と宇宙人」中沢伸弘 月刊国語教育

「実践報告 小学校と中学校をつなぐ古典学習の試み―小学六年生「今も昔も」と中学一年生「竹取物語」の実践」太田憲孝 月刊国語教育研究³

「特集 古典の世界にふれる」三浦和尚 月刊国語教育研究³

平成十九年

中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点と可能性―『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類」中島和歌子 札幌国語研究

「古典教材における挿絵掲載の実態」田原沙紀 山口国語教育研究

「思考型読解力を育む授業の一考察―中学校一年『竹取物語』の授業取材を通して」西俊六 盛岡大学紀要⁴

「特集 古典教育を考え直す 生涯学習における古典指導―「古典再発見」菊川恵三 日本語学

平成二十年

「中学校国語教育における古典学習指導の留意点

―『竹取物語』第1時限目の授業案研究」西田直樹 作新学院大学人間文化学部紀要

「特集 ことばの文化に親しむ」水戸部修治 実践国語研究

「私の授業、大公開！定番教材に挑戦 入門期古典学習にRT的手法を―「蓬萊の玉の枝」小林康宏 月刊国語教育

「実践報告 月の語彙と親しみ、昔の人々の想いに触れよう―月の語彙指導から古典へ」中田康子 月刊国語教育研究⁵

平成二十一年

「学習指導過程の発想の転換7 実践5 小学生が『枕草子』をすごく調べていて驚いた―「活用」

段階・2」大熊徹 教育科学国語教育

「学習指導過程の発想の転換4 実践2 宮沢賢治「雪わたり」から古典の世界へ―長期の「0次」

段階・1」大熊徹 教育科学国語教育

「特集 伝統的言語文化の教材開発」鳴島甫大森和彦 福島卓子 堀田悟史 月刊国語教育研究

平成二十二年

「特集 追い風の中の古典指導」中村孝一 渡辺真由美 杉本賢二 簗手明子 西岡裕二 堀田悟史 半田淳子 月刊国語教育

「(シンポジウム) 研究授業」中田祐二 吉田崇 月刊国語教育研究

「『竹取物語』の受容―朝プリントを通して」間瀬由美 国語教育研究

「中学校における古典 『竹取物語』学習指導の実践とその考察」町田恵理子 王朝細流抄

平成二十三年

「中学生と古典との出会いをめぐる一提案―「死」との出会いを意識した授業開発の実践」竹本正子

○国文学

平成十二年

『豊饒の海』論―『竹取物語』典拠説の再検討」中沢明日香 国文白百合

「大山崎離宮八幡宮社家足田家の文雅について

―古今伝授―その一『竹取物語鈔』（翻刻）」管宗次 武庫川国文

「大山崎離宮八幡宮社家足田家の文雅について

―古今伝授―その二『竹取物語鈔』（翻刻）」管宗次 武庫川国文

『狭衣物語』の表現―「光る」主人公」新井幸恵 東洋大学大学院紀要

「挨拶のことばと源氏物語―其の一、竹取物語と宇津保物語と枕草子から」上野辰義 仏教大学文学

部論集

「翁のなにがし守りけんやうに―『竹取』引用にみる『源氏物語』夕霧巻の一条御息所と落葉宮の物語」諸岡重明 立教大学日本文学

「黒川文庫蔵『竹取物語』関係書籍について」山崎正伸 実践女子大学文芸資料研究所年報

「田中大秀『竹取翁物語解』開板への階梯」山崎正伸 実践女子大学文芸資料研究所年報

「竹取物語「燕の子安貝」の段に於ける本文順序の乱れについて」安藤重和 日本文化論叢

「物語の出で来はじめのおや」井上英明 論集平安文学

『竹取物語』の「富士の煙」―郊祀祭天の儀との関わりから」山根啓子 平安朝文学研究

『竹取物語』試論―貴種流離譚的構造をめぐって」伊勢英明 仙台電波工業高等学校校研究紀要

『竹取物語』と神仙思想―見捨てられた不死薬」岡部明日香 中古文学論攷

『竹取物語』求婚者考―モデル論存疑」重松紀久子 椙山国文学

『竹取物語』の竹をめぐって―竹の（うつほ）空間」松本美穂 湘南文学

『竹取物語』求婚譚ノート」片山剛 金蘭国文

自由間接言説の本質とは何か―「移り詞」から「自由間接言説」へ」東原伸明 国文学

「老岐の「嫦娥」」谷島由希子 大宰府国文

平成十三年

「大山崎離宮八幡宮社家足田家の文雅について

―古今伝授―その三『竹取物語鈔』・『百人一首口受』（翻刻）」管宗次 武庫川国文

「竹取翁物語解目録」田中大秀

「竹取物語解（草稿合冊本）」田中大秀

「竹とりの翁の物語（校訂本）」田中大秀

「竹取物語解副卷（中書本）」田中大秀

「竹採物語（古写本）」田中大秀

「竹取物語解（中書本）」田中大秀

「竹取物語解追考」田中大秀

「竹取物かたり抄（補註本）」田中大秀

- 「竹取翁物語解（版本）」田中大秀
- 「竹取翁物語解（草稿本）」田中大秀
- 「平安初期和文における接続助詞ド・ドモの機能」江原由美子 岡大国文論稿
- 「夕霧巻における竹取引用」井野葉子 論叢源氏物語
- 「生誕・裳着・結婚・算賀——『竹取』『落窪』から『源氏』へ」小嶋菜温子 源氏物語研究集成
- 「異伝と『竹取物語』の方法——言い遣いたいこと 第一——片桐洋一 礫
- 「『竹取物語』の本性——異界と人間をめぐって」鈴木日出男 文学
- 「『竹取物語』考——話型論の視点から」藤田真輝子 岩大語文
- 「平安朝物語における儒教——「孝」と「三従」を中心として」田中徳定 駒沢国文
- 「古代物語文学と和歌との交渉」大洋和俊 静岡英和女学院短期大学紀要
- 「平安散文における「人」——非人称の叙述形式」高木和子 日本文芸研究
- 「不老長寿の意義と物語の世界——竹取の翁と」夏山繁樹 福田景道 福祉文化
- 「日本文学のなかの「ことば遊び」（二）——倉西博之 金蘭短期大学研究誌

平成十四年

- 「法華経直談書にみえる「かぐや姫の伝承」」鈴木佐内 和洋国文研究
- 「『源氏物語』ほか平安和文資料における「とし」「スミヤカ」「早し」——意味負担領域から見る和漢混
淆史」安部清哉 源氏物語の魅力を探る

- 「『源氏物語』における『竹取物語』の引用——空蟬とかぐや姫」木山美奈子 新潟大学国語国文学会誌
- 「翻刻 竹取物語（三冊完本）」糸井通浩 奈良絵本上
- 「影印 竹取物語（三冊完本）」糸井通浩 奈良絵本上
- 「翻刻 竹取物語（中川文庫本）」糸井通浩 奈良絵本上
- 「影印 竹取物語（中川文庫本）」糸井通浩 奈良絵本上
- 「『竹取物語』の富士山」鷺山茂雄 平安朝文学研究
- 「『竹取物語』『富士の煙』攷——反魂香影響説をめぐって」藤田景子 東京女子大学日本文学
- 「『竹取物語』における「心ざし」と「契り」」大場智恵 日本文学ノート
- 「『竹取物語』の起源譚的結末——〈今〉は〈昔〉の男の心」後藤幸良 平安朝文学表現の位相
- 「竹取物語〈年立〉攷」関根賢司 国学院雑誌
- 「『竹取物語』論——異次元の旅人・かぐや姫——」今関敏子 古代中世文学論考
- 「比喩としての「垣」（上）」テレサ・マルティネス・フェルナンデス 詞林
- 「王朝の〈みやび〉とジェンダー——千野モデル修正案から」小嶋菜温子 立教大学大学院日本文学論
叢

「物語文学始発期の書写形式を憶測し、古代物語の特性を問う」田中新一 金城学院大学論集（国文学編）

- 「（インタビュー） 写本へのフィールド・ワーク」室城秀之 物語研究
- 「平安時代の「物語」と物語文学」兵藤裕己 岩波講座文学
- 「平安朝文学における自然観」小町谷照彦 源氏物語研究集成
- 「物語系古筆切三種——竹取・源氏絵詞・大鏡の各断簡」田中登 国文学（関西大学）
- 「『菩薩の偉業物語の如意蔓』への補注」神山重彦 愛知学院大学人間文化研究所紀要・人間文化
- 「平安時代の富士山——あこがれとおそのあいだで」和田律子 富士山と日本人

平成十五年

「説話生成についての一考察」海老原雅人 早稲田実業学校研究紀要

「中村本『夜寝覚物語』の〈夢〉の論理」藤井由紀子 詞林

「竹取の翁物語」（竹取物語）を読む」堀口和正温故叢誌

「竹取物語」「竜の頸の珠」難題譚の構造」伊沢美緒 愛知淑徳大学論集

「斑竹姑娘」の難題譚と『竹取物語』―鍵を握る「火鼠の裘」内田順子 中国と日本の説話1（説話論集）

「竹取物語」難題求婚譚の達成―物語文学成立史一面」吉田幹生 古代中世文学論考

「家」と結婚―かぐや姫の「女の身」小嶋菜温子『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ古典編1』

「かぐや姫の創造」土方洋一 『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ古典編1』

「特集・二十一世紀の古典文学―古代散文研究の軌跡と展望 『竹取物語』小嶋菜温子 解釈と鑑賞

「紫式部の「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁」享受―桐壺更衣と桐壺帝の物語を例として」曾根誠一 古代文学研究（第二次）

「古代物語と成人儀礼」広田収 説話・伝承学

「物語文学言説の動態的分析―自由間接言説の多元的生成と〈読み〉の〈時間の循環〉」東原伸明 高知女子大学紀要（文化学部）

「竹取翁」歌群から『竹取物語』へ」三浦佑之 新日本古典文学大系（月報 99）

「枕詞はなぜ衰退し、消滅したのか？―耳の和歌と目の和歌、仮名の発明がもたらしたもの」小池清治 外国文学

平成十六年

「未翻刻資料の追跡―琴ひきや麻―附翻字」武井麻子 季刊ぐんしよ

「唐物語」の文学的特質」中根千絵 古代文学研究（第二次）

「幸福な結末―御伽草子と王朝物語」福田景道 福祉文化

「竹取物語」における「用の類」から「体の類」への変化」広瀬栄史 語彙研究の課題

「竹取物語」「竜の頸の珠」難題譚の方法―『史記』撰取の実相とその改変」伊沢美緒 愛知淑徳大学論集

「物語享受における〈美貌〉と身分意識―入内拒否を描く『竹取物語』の特異性」川勝麻里 立教大学大学院日本文学論叢

「帝の系譜―異郷と死の起源譚」関根賢司 源氏物語と帝

「竹取物語」と伊勢斎宮―かぐや姫の神秘性の帰結するところ」宮崎美由紀 瞿麦

「竹取物語」に見える「影」の表現をめぐる、一試論―羽衣説話、あるいは日本の靈魂観との関連で」

韓明心 麗沢大学紀要

「竹取物語」登場人物「性格論」第二稿―帝・かぐや姫・翁を中心に」井上英明 明星大学研究紀要（言語文化学科）

「竹取物語」に見る人間模様―翁とかぐや姫の結婚観を中心に」飯塚誠 関東短期大学紀要

「竹取物語」「竹公主」から「斑竹姑娘」へ」宋成徳 京都大学国文学論叢

「物語における「内侍（典侍・掌侍）」の領域―平安朝「帝物語」をめぐって」石坂妙子 国文学研究

資料館紀要

「姿を消した「少将」——本文表現史の視界」久下裕利 学苑

「仁明朝の和風文化と六歌仙——掛詞・物名・竹取物語」平野由紀子 古今和歌集研究集成 平安朝の食文化考（4報）

「『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』および『平中物語』について」池添博彦 帯広大谷短期大学紀要

「黎明期の日記文学——竹取物語と土佐日記あるいは古代後期の日記文学の文学形式とパロディ」三谷邦明 日記文学新論

「オホモノヌシの物語——『古事記』と『日本書紀』と」阪下圭八 大和

平成十七年

「古代語としての「へち」——「宇治」と「憂し」の掛詞をめぐって」西耕生 愛文

「古今伝授資料『竹取物語鈔』」大山崎離宮八幡宮神官 正田家文芸資料集

「あさはかなる女、目及ばぬならむかし」の喩性——源氏物語の芸——渡辺久寿 表現と文体

「文学史の中の『源氏物語』 1 王権と恋・天と地と——桐壺帝と『竹取物語』の帝」大井田晴彦 人物で読む源氏物語

「文学史の中の『源氏物語』 1 『竹取物語』引用をめぐって——光源氏と夕顔」大井田晴彦 人物で読む源氏物語

「あしずり」と「かひなし」——『伊勢物語』第六段への一視点」丁莉 表現研究

「かな文学の創出——『竹取物語』の成立と享受に関する若干の覚書」高田祐彦 文字とことば

「『竹取物語』に見る人間模様 二——貴公子たちの愛のない求婚」飯塚誠 関東短期大学紀要

「引用漢籍通覧——『源氏物語』以前」伊藤禎子 古代中世文学論考

「虹と日本文芸（十二）——中古散文をめぐって（1）」荻野恭茂 相山女学園大学研究論集（人文科学篇）

「声から紙へ——和歌の宿る場所」浅田徹 和歌をひらく

「文学の発生と貴種流離譚」山岡敬和 国学院大学紀要

平成十八年

「有情物の存在を表す「アリ（アル）」と「ヨリ（オル）」「キル（イル）」」柳田征司 国語学論集（小林芳規喜寿）

「浮舟をめぐる（ことば）——天人なども舞ひ遊ぶこそ尊かなれ」横溝博 人物で読む源氏物語

「二つの葉——竹取物語の収束力」瀬戸宏太 常葉国文

「『竹取物語』「しらせ給ひたるかぎり十六そをかみにくとあけて」考」飯島裕三 学習院高等科紀要
「月を忌む——その源流」三浦真貴 瞿麦

「特集・説話・物語の異空間 「月のみやこ」——『竹取物語』の異空間」仁平道明 国文学解釈と鑑賞

「変化の人といふとも、女の身持ち給へり——『竹取物語』の基調となった仏教要素」石井公成 駒沢大学仏教文学研究

「『竹取物語』に見る人間模様 三——帝の求婚をも拒否したかぐや姫」飯塚誠 関東短期大学紀要

「『竹取物語』と仏伝」久保堅一 中古文学

「日本の書物への感謝(五)『竹取物語』」四方田大彦 図書

「『竹取物語』の表現手法―動画的表現と静止画的表現をめぐって」関一雄 日本文学研究(梅光学院大学)

「前期物語」室城秀之 日本語日本文学の新たな視座

「物語古筆研究覚書」田中登 平安文学の新研究

平成十九年

「佐々木弘綱の俚言解」永田信也 語学文学

「巻頭言 「羽衣」と「かぐや」と「嫦娥」と「チャンドラーン」」矢口広人 橘香

「平安和文の「いはむや」の用法―会話文中の用例を中心に」関一雄 日本文学研究(梅光学院大学)

「初瀬(長谷) 寺観音信仰より探る―『源氏物語』から「薫しべ長者」伝説への道程」飯島裕三 学習院高等科紀要

「源氏物語の門―情感の創造」神尾暢子 源氏物語の展望

「〔翻・複〕 九曜文庫蔵 竹取物語絵巻」中野幸一 竹取物語絵巻(奈良絵本・絵巻集成1)

「平安文学語彙の研究―『竹取物語』における「うるはし」北村英子 大阪樟蔭女子大学論集

「特集 日本庶民文芸と中国 『竹取物語』は何処から来たか」静永健 アジア遊学

「『竹取物語』の日本色」彭丹 国際日本学研究

「『竹取物語』蓬萊訪問譚の再検討―典拠・話型・主題」東望歩 中古文学

「竹取物語「火ねずみの皮衣」の段冒頭の一文について―強調の係り結びと本文校訂に関する視点から」柳沢朗 平安文学 場と表現

「『竹取物語』と東アジア世界―難題求婚譚を中心に」河添房江 源氏物語へ 源氏物語から

「〔翻〕立教大学蔵『竹取物語絵巻』解題と翻刻」宮腰直人 立教大学大学院日本文学論叢

「『竹取物語』と孝子董永譚―日中天女降臨譚における『竹取物語』位置づけの試み」三木雅博 国語国文

「かぐや姫と〈女の罪〉―浮舟との比較から」小嶋菜温子 王朝文学と仏教・神道・陰陽道(平安文学と隣接諸学2)

「『竹取物語』考」白崎祥一 早稲田研究と実践

「『竹取物語』の難題物考―幣帛と依代、二つの機能をめぐって」山下絵美 湘南文学

「特集…月光 『竹取物語』―月界からの使者」川名淳子 国文学

「〔翻〕 竹取物語絵巻の本文」針本正行 国学院大学大学院紀要(文学研究科)

「竹取物語本文校異一覧(一)」王朝物語史研究会慶応義塾女子高等学校校研究紀要

「特集・言語研究と文学研究 中古物語の冒頭表現の魅力―文法研究からみた」長谷高之 解釈と鑑賞

「前期物語の通過儀礼―『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』を中心に」室城秀之 王朝文学と通過儀礼(平安文学と隣接諸学3)

「王朝の家と鏡―かぐや姫・落窪の姫君の結婚から」小嶋菜温子 女と子どもの王朝史(叢書・文化学の越境13)

「前期物語と和歌―竹取物語からうつほ物語へ」室城秀之 源氏物語と和歌を学ぶ人のために

「大内裏と内裏の文学空間」広田収 王朝文学と建築・庭園(平安文学と隣接諸学1)

「自動詞「思ひ出づ」について」宮腰賢 国学院雑誌

「べく」の通時的変化—deonticからepistemicへ」妹尾江利子 青山語文
「異郷遊歴 古典文学の異空間（5） 竹（たけ）—伝承のミッシング・リンク『丹後国風土記逸文』
『竹取物語』 前田速夫 国文学
「特集…月光 月に憑かれて」東雅夫 国文学

平成二十年

「絵本『竹取物語』の誕生—文・江国香織 画・立原位貫『竹取物語』 増田喜昭 波
「講演」 絵巻物・絵本の世界はおもしろい—日本人の空想力がみえてくる」石川透 広がる奈良絵
本・絵巻

「日本古典文学のユートピア」石川透 ユートピアの文学世界

「竹取物語」の位相」保立道久 チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物語絵巻

「CBL本『竹取物語絵巻』二巻」渡辺雅子 チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物

語絵巻

「絵巻から読む『竹取物語』 小嶋菜温子 チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物語絵
巻

「The Tale of the Bamboo Cutter」ドナルド・キーン チェスター・
ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物語絵巻

「翻・複」 竹取物語絵巻」磯部祥子 チェスター・ビーティー・ライブラリ所蔵 竹取物語絵巻

7

「へものあはれ」の淵源—「若紫」の密通と「鶯鶯伝」 諸田龍美 和漢比較文学

「天人から天女へ—なぜ五衰の天人が女性とされるようになったのか」山本陽子 明星大学研究紀要

（言語文化学科）

「死者と昇天—『竹取物語』再会へ」室田知香 むらさき

「玉鬘の尚侍就任—「市と后」をめぐる表現から」湯浅幸代 むらさき

「狭衣物語」先行物語撰取の様相」金沢典子 法政大学大学院紀要

「竹取物語」の帝像」菅原秀 弘前学院大学文学部紀要

「竹取物語」における月」滝沢綾子 長野国文

「天皇・上皇」秋沢互 王朝文学と官職・位階（平安文学と隣接諸学4）

「十世紀の恋愛文学覚書」吉田幹生 成蹊国文

「中古王朝物語の会話文—地の文との境界をめぐる」黒木邦彦 詞林

「宇多・醍醐朝の宮廷文学と東アジア」山口博 王朝文学と東アジアの宮廷文学（平安文学と隣接諸

学5）

「近代の物語史が捉えた伊勢物語の成立」神野藤昭夫 『伊勢物語 虚構の成立（伊勢物語成立と享

受1）』

「容姿」の言葉—かたちを巡る物語文学史素描」山下太郎 王朝物語のしぐさ—ことば

「商い」の言葉—辻和良 王朝物語のしぐさ—ことば

「贈答歌の方法—『竹取物語』をめぐる」高野晴代 古筆と和歌

「不可能の自覚—語りと副詞「え」の用法」糸井通浩 王朝物語のしぐさ—ことば

「夜の寝覚」の男主人公をめぐる—物語史論のために」宮下雅恵 狭衣物語が拓く言語文化の世界

「虫めづる姫君の生活と意見—『堤中納言物語』「虫めづる姫君」をよむ」下鳥朝代 狭衣物語が拓く

言語文化の世界

「狭衣の父―世俗的な堀川大殿が新たな論理を獲得するとき」スエナガエウニセ 狭衣物語が拓く言語文化の世界

「竹取物語本文集成」王朝物語史研究会 竹取物語本文集成

「校異一覧」紹巴本竹取物語

「紹巴本書誌報告」松原志伸 紹巴本竹取物語

「復」 紹巴本 竹取物語」王朝物語史研究会 紹巴本竹取物語

「柏木・夕霧と「あはれ」希求の物語―第一、第二部世界への橋渡し」〈石上中納言物語〉との交渉」

永井崇大 源氏物語〈読み〉の交響

「鬚黒北の方と紫上―葛藤する〈前妻〉たち」笹生美貴子 源氏物語〈読み〉の交響

「翻」 国学院大学図書館蔵『竹取物語絵巻』（ハイド旧蔵）書誌・解題・翻刻」針本正行 物語絵

巻の本文とその享受に関する総合的研究

「源氏物語の登場」加納重文 源氏物語を読む（歴史と古典）

「平安和文会話文における連体修飾節連体形と連体形終止連体形の比較分析」土岐留美江 愛知教育

大学研究報告（人文・社会）

「〈身〉を〈心〉とする女君たち―『浜松中納言物語』『松浦宮物語』の転生と影」萩野敦子 日本文

学

「失われた月の喩―延喜元年八月十五夜或所歌合の新出資料をめぐって」池田和臣 文学

「幻」巻の時間と和歌―想起される過去／日々を刻む歌」鈴木宏子 源氏物語の展望

平成二十一年

「松毬」 天女の恋の新展開―松浦宮物語の形式と理念・断章」斎藤正志 松籟

「うつほ物語」の俊蔭漂流譚」大井田晴彦 王朝文学と交通（平安文学と隣接諸学7）

「伊勢物語」「竹取物語」から「小町草子」へ―富士山のイメージをとおして」小嶋菜温子 伊勢物

語 創造と変容

「狭衣物語」の斎院―『竹取』『伊勢』『源氏』から離れて〈物語〉の彼方へ」鈴木泰恵 王朝文学と

斎宮・斎院（平安文学と隣接諸学6）

「浜松中納言物語」における対比的な表現」菊地仁 平安後期物語の新研究

「竹取物語の会話文の「文末表現」―和文の会話文の文体的特徴をめぐって」西田隆政 文学史研究

「特集…文化における古い『竹取物語』における竹取翁のアイロニカルな役割」頼振南 日本語日本

文学（輔仁大学）

「特集…文化における古い 老いと孝養―『竹取物語』をめぐって」丸山隆司 日本語日本文学（輔

仁大学）

「日本女性の顔隠しと被衣の意味―古代、中世を中心に」増田美子 風俗史学

「物語世界を創り出す「表現」」荒曉子 聖和学園短期大学紀要

「この「翁」は「姫」である―『竹取物語』の本文批判」後藤康文 語文研究

「冷泉朝の終焉―玉鬘物語をめぐって」本橋裕美学芸古典文学

「大津皇子と在原業平―反復の問題」葛綿正一 沖縄国際大学日本語日本文学研究

「源氏物語」の先行物語受容―『竹取』『伊勢』『落窪』など」妹尾好信 源氏物語と王朝の教養

「竹取物語」の心とことば」高田祐彦 平安文学史論考

「特集・王朝物語の研究 物語文学誕生前史」 吉田幹生 国語と国文学・
「特集…流人の文学 「貴種流離譚」とは何か」 山岡敬和 国文学
「特集・人類と異類―古代文学から 天の迎えと極楽の迎え―『竹取物語』成立の背景としての浄土教」 吉田幹生 日本文学

平成二十二年

「家口」か「家子」か―『伊勢物語』二十三段の新たな読解のために」 早乙女利光 言語と文芸

『源氏物語』須磨巻における「月の都」の意味」 久保田由香 文化継承学論集

「座談会」特集 絵解きを愉しむ 王朝物語の絵画―『竹取』『伊勢』を中心に」 下裕利 山本登朗 横井孝 針本正行 上原作和 武蔵野文学・

「豊子愷訳『伊勢物語』について」 徐迎春 文献探究

『紅楼夢』と『源氏物語』における結婚拒否の女性像」 陳明姿 源氏物語と東アジア

「かぐや姫と難題物」 助口春花 花園大学日本文学論究

「『源氏物語』はどのように出来たのか？」を考えるために」 加藤昌嘉 中川照将 紫上系と玉鬘系―成立論のゆくえ（テーマで読む源氏物語論4）

「竹取物語絵」にみる異界と現世―CBL本・立教本、「不死薬の献上」 図をめぐって」 小嶋菜温子 王朝文学と物語絵（平安文学と隣接諸学10）

「魔女の降誕―『竹取物語』論断章」 土佐秀里 二松学舎大学論集

『更級日記』の「行方なく飛び失せなば」をめぐって」 横堀啓輔 日本文学論集

『源氏物語』第三部における「衣」―変奏する「かぐや姫」たちと「女の生身」 橋本ゆかり 王朝文学と服飾・容飾（平安文学と隣接諸学9）

「（シンポジウム）絵入りテキストの物語史―竹取・住吉等を中心に― 絵入りテキストの物語史をめぐって」 石川透 中古文学

「（シンポジウム）絵入りテキストの物語史―竹取・住吉等を中心に― 夢はどう描かれるのか―物語絵における夢の表現」 室城秀之 中古文学

「（シンポジウム）絵入りテキストの物語史―竹取・住吉等を中心に― 国学院大学所蔵の絵入り物語」 針本正行 中古文学

「（シンポジウム）絵入りテキストの物語史―竹取・住吉等を中心に― 『竹取物語』絵本―メトロポリタン美術館蔵を中心にして」 渡辺雅子 中古文学

『源氏物語』第二部後半の『竹取物語』受容」 室田知香 中古文学

『源氏物語』朝顔巻の藤壺―『竹取物語』のかぐや姫を視座として」 鈴木早苗 中古文学

「平安期における「をかし」の語義とその展開」 東望歩 古代文学研究（第二次）

「平安文学における五行の象徴とその機能―『土佐日記』と『竹取物語』をめぐって」 スワンラダー・アッタヤ 詞林

「豊子愷訳『竹取物語』について―豊子愷記念館の訳稿と比較して」 徐迎春 語文研究

「アマテラスの〈呼称〉と〈赫姫〉という存在―『塵荊抄』第十一話を中心に」 吉田唯 国文学論叢

「物語における機能としての帝―女の「かぐや姫」性をめぐって」 伊勢光 学習院大学大学院日本文学
日本文学

『竹取物語』末尾の富士山地名起源説話について」 出雲朝子 汲古

「特集・鏡像としての平安文学―価値変動の時代に 私の物語方法論叙説―」 どのように」 語られて

いるのかⅡ〈語り〉と〈言説〉の分析」東原伸明 解釈と鑑賞

「特集・鏡像としての平安文学―価値変動の時代に 私の王権論・王権論以降2―女一宮物語から」幻の源氏物語絵巻」まで」小嶋菜温子 解釈と鑑賞

「特集 〈終わり〉を読む―古典文学篇 『竹取物語』の〈終わり〉と物語史のはじまり」高橋亭 解釈と鑑賞

「特集 近世散文における引用と挿絵 京伝合巻における音曲の引用―書体の工夫と挿絵」佐藤至子 解釈と鑑賞

「平安時代物語に稀有な語―「さへづる」・「追い払ふ」・「蹴る」など」中西健治 論究日本文学

平成二十三年

『竹取物語』と六国史」内田順子 国語国文

「竹取物語の難題提示をめぐって」安藤重和 日本文化論叢

『竹取物語』の世界―主人公とテーマをめぐって」播摩光寿 滝川国文

「かぐや姫が残したもの―小さ子説話と昇天説話の視点から」菅原秀 弘前学院大学文学部紀要

「〔翻〕『竹取翁物語写』 堤康夫 『源氏物語注釈史の資料と研究』

「竹取物語の和歌」大井田晴彦 名古屋大学文学部研究論集（文学）

「〔移動〕からみる中古王朝物語文学史・粗描」萩野敦子 『狭衣物語 空間／移動』

「特集 平安朝文学史の輪郭 欧米圏」三村友希 解釈と鑑賞

「特集 平安朝文学史の輪郭 アジア圏」関口崇史 解釈と鑑賞

「特集 平安朝文学史の輪郭 『竹取物語』と神道」保立道久 解釈と鑑賞

『竹取物語』『燕の子安貝』吉田幹生 『鳥獣虫魚の文学史』（日本古典の自然観2 鳥の巻）

「特集 「言の葉」の創造力―歌と物語と史実の交渉― 物語の作中和歌―詠者のゆらぎ」岡田ひろ

み 古代文学研究（第二次）

「平安朝文学史の構想 「月宮」の周辺」山田尚子 国語と国文学

『竹取物語』絵の配列と多義性―逸翁美術館本と諏訪市博物館本の比較を通して」曾根誠一 花園大学日本文学論究

『落窪物語』の典葉助をめぐる求婚難題譚考―『竹取物語』の受容を中心に」梁丹 語文研究

○その他書評等

平成十二年

「奥津春雄著 『竹取物語の研究 達成と変容』 小嶋菜温子 日本文学

「奥津春雄著 『竹取物語の研究 達成と変容』 小泉篤史 平安朝文学研究

平成十三年

「奥津春雄著 『竹取物語の研究―達成と変容』 関根賢司 国文学研究

「奥津春雄著 『竹取物語の研究―達成と変容』 三木雅博 国語と国文学

平成十五年

「境界の侵犯から2―36待つ、そして(続)」和田忠彦 国文学

「イニシエーションとしての童―物語文学の児童文化的側面」馬場光子 研究―日本の児童文学

平成十六年

『孝女白菊の歌』の〈家〉とジェンダー―近代日本の起源へ―小嶋菜温子 日本文学

平成十七年

『世々に残さん』試論―三島由紀夫の初期小説の位相―原田香織 東洋

『代官手代』菊田泰蔵―「地域知」の媒介者―高橋章則 歴史評論

「関根賢司著『竹取物語論 神話／系譜学』」曾根誠一 古代文学研究(第二次)

平成十八年

「資料紹介―立教大学蔵『竹取物語』貼交屏風」宮腰直人 立教大学大学院日本文学論叢

「新出資料フェリス女学院大学本『竹取物語』紹介」三田村雅子 フェリス女学院大学文学部紀要「市

川昆監督、東宝・フジテレビ提携映画『竹取物語』」山田利博 宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)

「関根賢司著『竹取物語論―神話／系譜学』『伊勢物語論―異化／脱構築』」東原伸明 日本文学

「語り継がれる『西遊記』」青柳淳子 筑紫国文

平成十九年

「京都古典文学の英改作、英訳および新英訳」ラリー・ウォーカー 日本文学研究ジャーナル

「講演」『鬼(おに)』の話」天野雅郎 和歌山大学教育学部紀要(人文科学)

平成二十年

「〈シンポジウム〉特集「創立60年記念国際文化セミナー」日本の文化と心 討議」鶴見俊輔 福岡
ユネスコ

「特集・名無しの才能 伝統文化に、ニコ動カルチャーのルーツを探る―遊芸・よみ人しらず・口承
文芸・竹取物語。四つの観点から」矢賀部小雪 江古田文学

平成二十一年

「小嶋菜温子・渡辺雅子・保立道久解説チェスター・ビーティー・ライブラリイ監訳『チェスター・
ビーティー・ライブラリイ所蔵 竹取物語絵巻』」青木慎一 立教大学日本文学

平成二十二年

「かぐや姫・謎掛け・物語」林久美子 クロノス

「更新される「文化の記憶」―樋口一葉「暁月夜」論―関礼子 亜細亜大学学術文化紀要

「中上健次『重力の都』論―シャーマニズムで読み解く」菊谷見裕希 清泉語文

平成二十三年

「川端康成の『竹取物語』現代語訳」沼尻利通 福岡教育大学国語科研究論集

「盛り過ぎぬる宇治の大君―「手つき」をめぐる表現世界」太田敦子 物語文学論究

- 「源氏物語の懸想文」 林田孝和 物語文学論究
- 「日本十二支考〈卯〉」 浜田陽 帝京大学文学部紀要（日本文化学）
- 「火山と竹の女神」 福寛美 学習院大学上代文学研究
- 「日本の月見民俗に関する一考察」 No S u n g - H w a n 日本文学研究
- 「須磨の環境表象」 松岡智之 『古代文学論叢』

○引用・参考文献一覧

△テキスト▽

- ・『新版 竹取物語』室伏信助訳注 角川学芸出版 平成一三年
- ・『竹取物語考』加納諸平（『竹取物語全評釈 古註釈篇』上坂信男 右文書院 平成二年 所収）

△引用文献▽

〈書籍〉

- ・『芳賀矢一遺著』芳賀矢一 富山房 昭和三年
- ・『国文学註釈叢書 五』折口信夫編 名著刊行会 昭和四年
- ・『国学の本義』山田孝雄 畝傍書房 昭和十七年
- ・『折口信夫全集 十六卷』折口信夫 中央公論社 昭和三十一年
- ・『日本古典文学大系 竹取物語』岩波書店 昭和三十二年
- ・『日本文学史の研究』風巻景次郎 角川書店 昭和三十六年
- ・『日本古典文学大系 日本書紀』坂本太郎校註他 岩波書店 昭和四十年
- ・『物語文学史論』三谷栄一 有精堂 昭和四十年
- ・『竹取物語の研究 校異編解説編』中田剛直 塙書房 昭和四十年
- ・『国文学五十年』高木市之助 岩波書店 昭和四十二年
- ・『明治文学全集』落合直文編 筑摩書房 昭和四十三年
- ・『日本文学研究史』久松潜一 久松潜一著作集刊行会 昭和四十四年
- ・『戦時下抵抗の研究』——キリスト者、自由主義者の場合——『山本正秀 みすず書房 昭和四十四年
- ・『日本文学研究資料叢書平安朝物語Ⅰ』有精堂 昭和四十五年
- ・『日本古典文学全集 源氏物語』小学館 昭和四十五年
- ・『国学者の道』伊東多三郎 野島出版 昭和四十六年
- ・『契沖全集』久松潜一監修 岩波書店 昭和四十九年
- ・『新潮日本古典集成 竹取物語』野口元大校注 新潮社 昭和五十四年
- ・『折口信夫全集 第七卷』折口信夫 折口博士記念古代研究所編 中央公論社 昭和六十二年
- ・『物語文学成立史』藤井貞和 東京大学出版会 昭和六十二年
- ・『別冊国文学 竹取物語伊勢物語必携』鈴木日出男編 学燈社 昭和六十三年
- ・『現代文学における古典の受容』平山城児 有精堂 平成四年
- ・『綾足と秋成と』佐藤深雪 名古屋大学出版会 平成五年
- ・『新日本古典文学全集 竹取物語』小学館 平成六年
- ・『竹取物語の研究——達成と変容——』奥津春雄 翰林書房 平成十二年
- ・『ちりめん本のすべて』石澤小枝子 三弥井書店 平成十六年
- ・『国文学研究史』丸山茂 文芸社 平成二十一年
- ・『国学史再考——のぞきからくり本居宣長——』田中康二 新典社 平成二十四年
- ・『竹取物語 現代語訳対照・索引付』大井田晴彦 笠間書院 平成二十四年

〈雑誌〉

- ・「加納諸平に就いて」 森敬三『国語と国文学』大正十五年
- ・「竹取翁考」柳田国男『国語国文』四卷一号 昭和九年
- ・「国学・文芸学・日本学」久松潜一『理想』一二卷九号 昭和十三年
- ・「近代短歌」折口信夫『日本文学大系』河出書房 昭和十五年
- ・「日本的といふことに就いての反省——国文学の新しい出発に際して」西郷信綱『国語と国文学』二二三卷三号 昭和二十一年
- ・「古典と明治以後の文学」塩田良平『岩波講座日本文学史 第十四卷』岩波書店 昭和三十四年
- ・書評（山本嘉将著「加納諸平の研究」） 黒岩一郎『国語と国文学』昭和三十七年
- ・「国文学における民俗学的方法とその反省」三谷栄一『国語と国文学』四十二卷十号 昭和四十年
- ・「文献学の成立」大久保正『国語と国文学』四十二卷十号 昭和四十年
- ・「物語の出で来はじめの祖——竹取物語の文学史的意義——」上坂信男『国文学 解釈と教材の研究』十二卷 昭和四十二年
- ・「A比較国学Vの意義と可能性——新国学の将来——」内野吾郎『國學院雜誌』八十三卷十一号 昭和五十七年
- ・「竹取物語」三谷邦明『体系 物語文学史 第三卷』有精堂 昭和五十八年
- ・「和辻哲郎 精神史と古典文学」小峯和明『国文学 解釈と鑑賞』平成四年
- ・「書評」小嶋菜温子『日本文学』四十九卷九号 平成十二年
- ・「書評」三木雅博『国語と国文学』七十八卷二号 平成十三年
- ・「書評」関根賢司『国文学研究』百三十四号 平成十三年
- ・「中古物語の軌跡と展望」『竹取物語』小嶋菜温子『国文学 解釈と鑑賞』六十八卷二号 平成十五年
- ・「小学校国語教科書教材「かぐやひめ」採録の変遷」中嶋真弓『学び舎…教職課程研究』平成二十二年
- ・「古典教材としての『竹取物語』」福田孝『全国大学国語教育学会発表要旨集』平成二十五年
- ・「加納諸平の研究 下篇」井上豊太郎 起雲閣

△参考文献▽

〈書籍〉

- ・「竹取物語」上坂信男全訳注 講談社 昭和五三年
- ・「竹取物語考」加納諸平『竹取物語全評釈 古註釈篇』上坂信男 右文書院 平成二年 所収
- ・「竹取物語全評釈 本文評釈篇」上坂信男 右文書院 平成十一年
- ・「鑑賞 日本古典文学 竹取物語」三谷栄一編 角川書店 昭和五十年
- ・「新日本古典文学大系 竹取物語」岩波書店 平成九年
- ・「竹取物語の研究 本文篇」新井信之 クレス出版 平成十一年
- ・「竹取物語評解」三谷栄一 有精堂 昭和二十四年
- ・「近世和歌史論」山本嘉将 クレス出版 昭和三十三年
- ・「日本文学史の研究（下）」風巻景次郎 角川書店 昭和三十六年
- ・「加納諸平の研究」山本嘉将 初音書房 昭和三十六年
- ・「平安時代の漢文訓読語につきての研究」築島裕 東京大学出版会 昭和三十八年
- ・「古典の再評価——文芸科学の樹立へ」岡一男有精堂出版 昭和四十三年

- ・『王朝の文学と方法』塚原鉄雄 風間書房 昭和四十六年
- ・『日本近代文学大事典』日本近代文学館編 講談社 昭和五十二年
- ・『竹取物語絵巻の系譜的研究』徳田進 おうふう社 昭和五十三年
- ・『竹取と浮雲』篠田浩一郎 昭和五十六年 集英社
- ・『竹取・伊勢物語の世界―平安初期の思想的考察』田中元 吉川弘文館 昭和五十七年
- ・『日本古典文学大辞典』日本古典文学大辞典編集委員会編 岩波書店 昭和六十年
- ・『古代和歌史論』鈴木日出男 東京大学出版会 平成二年
- ・『東京大学所蔵草双紙目録』近世文学読書会編 青裳堂書店 平成五年
- ・『かぐや姫幻想 皇権と禁忌』小嶋菜温子 森話社 平成七年
- ・『日本古典文学研究史大事典』西沢正史編 弁誠社 平成九年
- ・『柳田國男事典』野村純一編 勉誠出版 平成十年
- ・『常用国語便覧 改訂版』加藤道理他編 浜島書店 平成十六年
- ・『教科書掲載作品1300』阿武泉日外アソシエーツ 平成二十年
- ・『平安文学をいかに読み直すか』編網谷知子・田渕句美子 笠間書院 平成二十四年

〈雑誌〉

- ・『もののあはれ』論の史的限界』風巻景次郎 『文芸復興』昭和十二年
- ・『実証主義と実証精神』風巻景次郎 『国語と国文学』一五九号 昭和十二年
- ・『近代短歌』折口信夫 『日本文学大系』河出書房 昭和十五年
- ・『竹取物語における『文体』の問題』阪倉篤義 『国語国文』第二五卷第一号 昭和三十一年
- ・『明治における文学史研究―藤岡作太郎博士から五十嵐力博士へ―』岡一男 『国語と国文学』四十二卷十号 昭和四十年
- ・『和辻哲郎と津田左右吉―大正期における古典研究―』杉山康彦 『国語と国文学』四十二卷十号 昭和四十年
- ・『国文学における民俗学的方法とその反省』三谷栄一 『国語と国文学』四十二卷十号 昭和四十年
- ・『万葉のゆくえ―恋の歌の発想・表現をめぐって』益田勝実 『国文学 解釈と鑑賞』第三四卷第二号 昭和四十四年
- ・『月の都―紫式部の『竹取物語』接種の方法―』奥津春雄 『国文学研究』四十三号 昭和四十六年
- ・『『宇津保物語』における俊蔭女』須見明代 『東京女子大学日本文学』昭和四十八年
- ・『竹取物語覚え書』室伏信助 『國學院雑誌』七十六卷十一号 昭和五十年
- ・『拾遺集恋歌の表現構造』小町谷照彦 『国語と国文学』第四七卷第四号 昭和五十年
- ・『新国学の提唱とその学史的意義』内野吾郎 『國學院雑誌』七十六卷十一号 昭和五十年
- ・『日本文化学としての新国学の方法序説』内野吾郎 『國學院大學日本文化研究所紀要』三十七号 昭和五十一年
- ・『折口信夫の国学観とその展開』内野吾郎 『國學院雑誌』七十九卷十一号 昭和五十三年
- ・『竹取物語と中世竹取翁伝説―姫の結婚と結婚拒否の間』田口守 『中古文学』第二三三号 昭和五十四年
- ・『柳田國男の神道・国学観と新国学論の醸成』内野吾郎 『國學院大學日本文化研究所紀要』四十八号 昭和五十六年
- ・『かな文の出で来はじめ―竹取物語』渡辺実 『平安朝文章史』東京大学出版会 昭和五十六年

- ・『源氏物語』と『竹取物語』の関係―住吉信仰を通して― 所京子『古代文化』 昭和五十七年
- ・戦後〆柳田学〰の展開と新国学論の行方 内野吾郎『國學院雜誌』八十三卷四号 昭和五十七年
- ・『竹取物語』の異郷と現実―語りの眼 鈴木日出男『国語通信』昭和五十七年
- ・『竹取物語』三谷邦明『体系 物語文学史 第三卷』有精堂 昭和五十八年
- ・『竹取物語』関根賢司『研究資料 日本古典文学 第一卷』明治書院 昭和五十八年
- ・『竹取物語と神仙譚―文人と物語・〆初期物語成立史階梯〰― 渡辺秀夫『日本文学』昭和五十八年
- ・『源氏物語の内なる竹取物語』川添房江『国語と国文学』 昭和五十九年
- ・『仮名物語の想像力・覚書』土方洋一『鶴見大学紀要』昭和五十九年
- ・『竹取物語断簡新出二葉―(付) 延べ書き「富士山記」―』高田信敬『国文学研究資料館紀要』昭和五十九年
- ・『言の葉をかざれる玉の枝―物語言語の生成―』高橋亨『国語と国文学』 昭和五十九年
- ・『幻き人』竹取翁礼讃の書―『竹取物語』の主題と方法― 妹尾好信『国文学攷』昭和五十九年
- ・かぐや姫昇天の原因ノート―『竹取物語』求婚部の展開に即して― 曾根誠一『語学と文学』昭和五十九年
- ・『竹取物語』における帝の意義 森地奈津実『学習院大学国語国文学会誌』昭和五十九年
- ・『新国学への視線 戦後折口学の原点』内野吾郎『国文学 解釈と教材の研究』三十卷一号 昭和六十年
- ・『源氏物語から見た竹取物語―長恨歌を媒介として―』高橋亨『国文学解釈と教材の研究』昭和六十年
- ・『本文の表層と深層―竹取物語の表現』三谷邦明『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号昭和六十年
- ・『研究の現在…竹取物語から源氏物語へ』阿部好臣『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号昭和六十年
- ・『伝承から物語へ―竹取物語の成立』益田勝実『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号昭和六十年
- ・『竹取・伊勢・源氏―仮名文の語り』秋山虔『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号 昭和六十年
- ・『物語とことば』渡辺実『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号 昭和六十年
- ・かぐや姫―竹取物語主人公の誕生 藤井貞和『国文学解釈と教材の研究』昭和六十年
- ・『竹取物語の享受』川添房江『国文学解釈と教材の研究』三十卷八号 昭和六十年
- ・『手習巻の相互連関性―竹取・伊勢・浮舟―』小林正明『物語研究(新時代社)』昭和六十年
- ・b『蜻蛉日記』の和歌と表現 小町谷照彦『女流日記文学講座 第二卷 蜻蛉日記』勉誠社 平成二年
- ・『説話と物語―竹取物語を中心として』吉田比呂子『弘前大学国語国文学』一二号 平成二年
- ・『女流による男歌―式子内親王歌への一視点』後藤祥子 関根慶子博士頒賀会編『平安文学論集』風間書房 平成四年
- ・『万葉集「恋ひ死ぬ」について』太田史乃『古代研究』第二五号 平成五年
- ・『竹取物語』の帝物語―『漢武帝内伝』からの離陸― 倉又幸良『中古文学』第五一号 平成五年
- ・『「恋死」という永遠の生―『源氏物語』柏木論のために』奥村英司『鶴見大学紀要 第一部 国語・国文学篇』第三一号 平成六年
- ・『恋歌のことばとかたち―「恋死」の歌をめぐる』松本真奈美 久保田淳編『論集 中世の文学 韻文篇』明治書院 平成六年

・「万葉の恋歌ノート―「恋ひ死ぬ」「恋ひわたる」「恋ひわぶ」考―」大野順一『文芸研究』八二号 平成十一年

・「反実仮想の歌―教育学部の授業から―」鈴木宏子『千葉大学教育学部研究紀要』五三卷 平成十七年

・「贈答歌における「恋死」表現―『後撰和歌集』を中心として―」矢澤由紀『中央大學國文』第五二号 平成二十一年

・「竹取物語の和歌」大井田晴彦『名古屋大学文学部研究論集 文学五七』 平成二十三年

・『国文学 解釈と鑑賞』（特集古典学者の群像―古代から近世まで）五十七卷三号 至文堂 平成四年

・『国文学 解釈と鑑賞』（特集古典学者の群像―明治から昭和戦前まで）五十七卷八号 至文堂 平成四年

・「近代「国文学」と近代「国文学史」の来し方と行く末―語義・概念・価値観・用語の再検討―」吉田比呂子『水門』二十五号 平成二十五年